
略 妹様へ

斉藤さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

略 妹様へ

【コード】

N8515X

【作者名】

斉藤さん

【あらすじ】

妹を殺したい兄と、兄が大好きな妹の関係を書く物語です。

序章 昔語りの嫉妬

ああ、待っていたよといっても、僕のことなんて誰も知らないだろうね。

実はルーベス辺境伯なんて呼ばれる一族の僕は長男という奴だったんだ。英雄の血統なんて国からは呼ばれ、国境付近で帝国と睨みあいなんかしている軍事拠点の領主、しかもその後継者。

で在った筈だった。

自分で言うのもなんだが、僕には才能があつた。凡百には劣らないだけの才能が、それもそのはずだ、剣聖と霸王なんて呼ばれた魔法使いの母から生まれたのだ。

その血は嘘をつかなかつたのか、恵まれた才能を手にして僕は生まれ、その二人に恥じないようにと頑張っていた。

だがそうやって頑張っていたはずの僕は、辺境伯の後継者としての地位を追われることになる。四つ下の妹の所為で。

妹は俗に言われる天才だった、いやあれは天才なんてもんじゃない、父と母を超えた化け物だ。

妹は生まれて始めて持った剣で、僕を打倒し、魔力においても僕を超越し、技術を持って僕を隔絶した。たった五歳の子供に九歳の僕は容易く負けたのだ。

結果として与えられたのは、両親からすら無能、そもそも妹は僕のことを比べる対象にすらしていない。

凄まじいピエロだったよ、こっちは必死に追いつこうと努力していたんだからさ。

かくして辺境伯の後継者であった僕は、この家一番の出廻らしとなった。

妹はあらゆる意味で優秀だ、笑顔一つで人を引き連れ、勉学さえも簡単に吸収し、いつの間にかその分野を習熟している。

結果として残ったのは、僕と妹の絶望的無さだ。何一つ僕は妹に勝てなかった、努力した、寝る間さえないほどに僕は努力しても、何一つ妹には敵う事は無かった。

そしてとうとう、両親さえ邪魔になったのか、違う家に養子に出される始末だ。

そして公爵家の後継者だったはずの僕は、その下、男爵家の養子となったわけだ。

その際に言われた言葉も傑作だ、駄作よアイシャさえ居なければお前は立派な後継者だった、なんて実の父親に言われたぐらいだ。流石に泣いた、ちなみに母親はただ薄く笑うだけで、何もいいやしない。この時流石に分かってしまった、当時まだ十二の僕だったが、自分はずいぶん前からのこの家に必要の無い存在だったと。

あの時は泣いたね、本当に泣いたさ、悔しくて、悔しくてさ、いやそれ以上に苦しくて、ひたすらに剣を振っていたよ。

長年やっていた習性だろうか、いや今になって分かるけど、努力って自分を裏切らないんだよ。たった一つ信用できたのが、あの時の自分には努力だって。

だいぶ正気じゃないよね。

けどさ、本当にあの当時信用できたのはそれだけだったんだ。それからさ、努力以外が信じられなくなってきたのは。

たださ、あの時実は一人だけ味方がいたんだよ。誰だと思う、誰だと思う、本当に笑えかぎりだとき、たった一人だけ俺を庇った奴が居るんだよ。

いや失礼、ちょっと荒くなっちゃったけど、お分かりかもしれないが妹だ。

あいつは能力はともかく精神はまだ餓鬼でさ、今考えてみればそれが付け入る好きだったのかもしれないけど、あの両親からずいぶん純白なものが生まれたと思うよ。

「お兄様、何でアイシヤを置いてどっかいつっちゃうの」

流石にその言葉を聞いたとき思ったさ、お前の所為だつて、お前が優れすぎていたからだつて、いやそれ以上に僕が無能だつたというべきだろうか。

その時僕は何をしたと思う、傑作だよ、妹を殺そうとしたのさ。正直あの時は殺意しか無かつたよ。

けどさ、自分の今までの全てを混めて妹を殺そうとしたのさ。結果は最高だよ、笑えるぐらいに最高さ、妹はさ何事も無くよけて、俺の一撃で終了。

言った言葉も覚えてるさ、そんな不意打ちの訓練反則だよお兄様、だよ。努力しても届かない壁はさ、今でも覚えている僕の最高の攻撃を、はははは、訓練呼ばわりさ。

そしてあの当時の集大成を上回る一撃で気絶。

絶望すらわかなかつたさ、そのおかげで一つの決意が出来たけどさ。別に妹が悪いわけじゃないが、殺してやるつてさ、俺は妹を殺してやるつて、絶対に殺すつて、殺して、殺してやるつて。

あいつだけは絶対に殺すって、当時十二歳だったか、そんな子供はそれしか考えられなくてさ、それから十年たったけどさ。知ってるか今のあいつ、もはや人間じゃないさ。

一人で一国を落とすだって、もうあれは人間じゃない。

僕もだいぶって言うか、軍隊ぐらいならどうにかできるさ、麗しの父と母に感謝だよまったく。

だからさ今も悩むんだ、どうやったら妹を殺せるって、どう考えても一方的な虐殺しかされない、どうやったら妹を殺したらいいって。

あいつは僕よりもあらゆる意味で勝っている、知恵でも策でも何でもかんでも、あれだけ勝てる要素が無いんだ、勝っている部分は間違いなくこの卑屈な性格さ。

あとは性格の暗さ、根性が腐ったところか、さて君にお願いというのはさほど難しいことじゃないさ、あの軍神相手に暗殺しろなんていうほど僕も無粋じゃない。

あれを殺せる唯一つの機会、建国祭の御前試合の権利を譲れって事さ、僕が選ばれないのあの軍神の兄だからってだけ、君よりは弱くないのさ。

だが僕は軍神ほどには強くない、だからとりあえずよこせ、俺が軍神を殺せる機会を、といってももう終わりだろうけどね。

お前はとつくに死んでるんだ、そういうわけで死んでもらったんだ、僕は妹を殺したい、あいつを殺せば他はどうでもいい。

逆恨みも結構、殺したいほど妹を思っている兄だ。それぐらい許してくれてもいいだろう、命一つだ安くつくもんだ。

そしてごとりと地面に転がった体は、楽しみに血を噴出している

花火のようだった。

「王都御前試合出場権利もらったぞ、名前はなんだったか」

ここに一人の天才剣士の命が尽きた。

いつ剣を放ったかすら分からないその妙技に、もしかすると死体は歓喜していたかもしれない。

その男は何を突き詰め続けたのか、殺意という目標を消すこともなく、どの境地まで突き詰めたのか。

死んだはずの死体はまだそこに意識があるかのように一言だけ叫んだ。それがきくと剣士の最後の意地であったのだろう、死んだ体から声が放たれる。

「見事」

流石に驚いた彼は死体であるはずのそれが叫んだのだ。流石に動揺したのか、死体から取り出した参加権利である短刀を地面に転がしてしまふ。

何より自分に与えられた賞賛に、目を丸くしてしまふ。

誰一人認められもしなかった、その妹という太陽に隠れた夜空の星に、歓喜の音が響いたのだ。

今までとは違う浮ついたはずの笑顔が消え、優しくほころんだ表情を見せたそれは自然と自分勝手に殺した死体に頭を下げた。

「父からは駄作と、母からは無関心を、妹からは敬愛を、尋常の勝負じゃなかったけれど名乗りぐらい加えるべきだったよ。妹以外考えてなかったからさ、男爵家は父の所為で潰れて家名はないが、センセイだよ僕の名前はセンセイだ」

それだけ言うと彼はきびすを返して目的地に向かう。
優れた剣士で、自分よりも素晴らしい人物だったのだろう、だが殺した、不意打ちで、本来なら自分と互角以上の人物だったのかも
しれないと。

だが殺した、心臓に棘が刺さったように胸が痛くなりながら、殺したと、何度も心に呟く。

そしてあの麗しの家族を殺すと、愛しい家族よと、待っていてくれ、きつと殺すと、必ず殺すと、それが、それだけが、彼にとっての愛情表現だ。

これより始まる王都御前試合、

軍神	アイシャ	不敗	ロード
剣聖	グランツウオード	惨敗	センセイ
霸王	レイリアール	王道	ラストール
無双	ザインザイツ	神童	ヒルメスカ

より始まる戦いは、王国史上最悪の結末を迎える。

死者五百三十五名、行方不明者千五百六十二名、重傷者三千五百名、軽傷者六千五百名、後に王国滅亡の遠因となる試合。

その始まりは剣聖の死亡からであった。

あとがき

才能があっても、もっとすごい才能に潰されるって興奮する。

序章 昔語りの嫉妬（後書き）

ただし気が向いたら。

一章 御前試合前夜

その日は王国の建国祭の始まりだった。

北方の軍神が一つの国を落としさらに国力をつけた国は、いつにもましてお祭りムードという奴だっただろう。

国民の喜ぶ声がやけに響いていた、そんな楽しげな空気の中、ひなくれた男はおいしそうに鳥のから揚げを頬張っていた。

軽く塩コシヨウで味付けされたそれは、出来立てと言う事もあり、噛めば肉汁が舌を焼くように溢れて来ている。それがさらに食欲をそりももう一口といった具合に手が伸びてしまうが、主題はそこじゃない。

御前試合に登場するはずだだった剣士の一人、魔剣と呼ばれた剣士が殺されたという情報がようやく王国の責任者の元に届いたのだ。そしてそんな天才を殺したのが、ある理由から没落してしまった男爵家の養子であり跡取りとなっていたセンセイという名の息子である言う話だ。没落して以来行方をくらませていたと言う事だったが、こうやって御前試合に現れ、魔剣を召集した貴族の面子を潰したのだから、上へ下へと大騒ぎだ。

だがその生まれを知っているものが、不用意に騒がれることを拒みそれを黙殺したののだが、結果として今国の上層部では少しばかり、暗い空気が流れていた。

そんな不穏な空気の中、一人だけ人物の名前を聞いたとき喜んだのが、軍神と呼ばれる少女であった。

「ねえ、お父様、お兄様が帰ってって本当なの」

花香る風をまとつて少女は飛び跳ねながら自分の倍は在ろうかという父の背中に飛び乗る。軽い跳躍ながらその重力を感じさせない動き一つ一つに、国を滅ぼしたという才能を片鱗を見せ付ける。

見た目どおりの頑強な体つきをして居る、剣聖は軽い衝撃を感じつつも、柔らかな愛娘の幼い行動をとがめるのを一瞬忘れてしまふ。どれだけ血に濡れても白いその心に、剣聖はひどく心が休まるのだ。

だが逆に駄作としか思っていない息子には、この大切な娘を近づけたくなかった。

傍から見ればあの息子は、嫉妬の塊で酷く汚らしく、娘の美しさが穢れるとしか思えなかった。

つねに下から妬み上げる様に、汚らしいその嫉妬の感情が、娘との対比でいつそう汚く写ってしまふ。

それは娘の才能が凄まじすぎた事と言うのもそうだろう。なまじ息子も間違はなく自分に並ぶほどの才を持っていたのも事実だった。だがいま自分の背中に、ぶら下がっている娘の為なら、あの程度の才は捨てられたのだ。一娘に牙を剥くか分からない才など不要でしかなかった。

「そうだな、あの馬鹿者が帰ってきた」

「お兄様、強くなったんだね。だって御前試合に出られるんだもん、弱かったお兄様が強くなったら、また一緒に暮らせるのかな」

楽しみに利いてくる娘の言葉に、父親としては酷く同情してしまふ部分もある。

本来であればあの息子にだって、天才という言葉が与えられてもおかしくは無かったのだ。ただ背中の真の天才が、いたからこそ彼は無能扱いされた。

彼を男爵家に養子に出したのも、そういう視線を避けようと父親なりの努力でもあった。九割は娘に対して危害を与えないようにではあるが、一割は実は父親の優しさではあったのだ。

最もその男爵家は父親である自分が没落させてしまったのだから、恨まれていても仕方が無いと思っっている。

しかしそれだけでここまでやるとは思っていなかった、出来るだけ早めに潰しておこうと、自分を最初の対戦相手にあてがったりと、娘を守る為に必死になっていた。

「そうだといいが、あいつには才能なんて無い。卑怯な手管でも使ったのだらう、そういう者は我が家に不要だ」

「えー」

必死になつて戦つて勝利してその権限を得たのかもしれないと言うのに、父親としてそれを認めることは無いのだらう。

認めてしまえば、あの視線が娘に刺さる。あの嫉妬しかない瞳が、彼の愛した娘を汚しかねないと、その天使を穢れさせるものかと牙を剥く。単純な話なのだ、彼は娘のほうが大切に息子はどうでもいい。

娘という魅力ではない、とうにその娘の純潔を奪つたような父親だ。

すでに女としてしか見ていないのだらう。それを奪われるというただの嫉妬だ、ましてや彼女は兄に対して無償の信頼を寄せている。それが酷く剣聖の嫉妬に火をつける、だからこそ男爵家は潰されたのだ。

この男は所詮は小人であつて、娘を女としか見ていなかった。いやそのあまりの穢れの無さに、魅了されたといったほうが外れでは

ないかも知れない。

だからこそその内に隠すべき感情があふれてしまう。見苦しいまでの男の嫉妬、そうなのだ、この男もまた嫉妬というそれに気が狂っている。

きつと二人が会えば思うのだろう、流石は家族揃いも揃って、ここごとく破滅しているように似ていると、それは殺しあう理由にしかならないが、これから一日たてば嫌でもそうなるのだ、ちょうどいいタイミングの親子喧嘩だ。

同族嫌悪なんて人類の戦争の理由の筆頭だ、背中にぶら下がる娘を胸に抱く。

「ほえ」

いきなりすることに驚いたのか、目を丸くして間抜けな声を上げる。話すものかと男は心に誓った、妻などどうでもいいのだ。彼が大切なのはこの娘だけ、自分よりもはるかに強い最強。

その彼女をとられることのみ恐怖するのだ。

父親に抱きしめられて少し顔を赤らめながらも、まだ夜じゃないよと笑って頭をなでるその姿は、娼婦のようですらあるというのに、穢れないその言葉は誰にでも股を開く麗しの聖女だろうか。

ただ知らない少女はそれすらも受け入れるだけだ、きつと彼はことういふ部分すら息子に見られたと思っているのだろう。

ああ憎いと、そう思い続けているのだろう。

偉大なる護国の剣聖は自分の娘に惚れて関係に及ぶだけじゃない。息子に嫉妬して追い出した、醜い、自分はなんて醜いのだと、その事実を消す為だけに息子を捨てたのだ。

そう汚いのはどちらだ、嫉妬に狂って妹を殺そうとする兄か、そ

れとも娘の体に溺れた父が、その二人はまるで鏡のようだ。

まったく同じの正反対、合わせ鏡にして同じような人間を大量生産したらどうだ。

勝手に自分達で殺しあってくれよう。同族嫌悪の吐き気のする集大成がこの二人とも言えるかもしれない。

この場で美しく綺麗なままなのは、父親を優しく抱きかかえながら、兄のことをただ慕い、父親を娼婦のように、聖女のように誘う、アイシャと言う軍神だけだ。

原因はすべての美しい少女という形をした軍神、だがその周りから湧き出るのは嫉妬ばかりだという、さて本当に汚いのはどちらなのだろうか？

だが彼女の兄なら言ってくれよう。

「全て」だと。

場面は流れるように代わり、食事が終わった彼は堂々と御前試合の参加賞を見せ付けて王城の参加者の部屋に寝転がっていた。

かなりの人間から奇異の視線で見られるが仕方の無いことだろう。何しろ北方の貴族にしか見られない灰色の髪だ。そんな髪をしているものは、軍神と剣聖ぐらい、だからだろう知っているものは驚いてしまう。

彼は一体誰なのかと、家名もないどこかの腕自慢、たぶん北方の蛮族の出なのだろうと推察されるぐらいだろうか。元々英雄の血統とはそちら側の血を引いている者達の中でも力の優れているものに与えられる名称だった。

それが彼より十六代前に、蛮族との融和政策があったり戦争があ

ったりしたときに活躍したのが、灰色狼と呼ばれる彼のご先祖様だった。

あまり王都の方では見ることは無く、大公である剣聖とその家族ぐらいというのがこの国では当たり前の考え方なのだ。灰色の髪は北方の貴族というのはそれぐらい常識的なことではあったが、流石にそれは無いと誰もが首を振る辺り。

剣聖の長男というのはよっぽど秘匿とされているのだろう。

だからこそ彼は余計に嫉妬に狂ってしまっ。

何で、何で妹だけと、溢れるからだの熱は、ただの妹への嫉妬だ。あの綺麗な妹に対する、自分の醜さを見せ付けるあの妹の所為だ。

あの妹は無垢だ、真っ白の何一つ汚れること無い白、だからこそ綺麗過ぎる。無垢は優しさではない、純粹は優しさではないのだ。

優しさと自分がそうされたいという欲望の反映。打算的な代物に過ぎない、自分が下からされる、金銭の取引となんら代わりは無い。だがそれでもそういったものが優しさでも、純粹無垢よりはましだ。

あれは綺麗なんじゃない、自分達が汚いことを見せ付けるのだ。だからこそ彼は憎いのだ、全てを持っていて、拳句に美しい。

感情が殺意のように荒れ狂う、これから始まるその戦いの為の原動力が、ただその身を焦がすような嫉妬が、軋む心を立ち直らせる。

「足掻くんだ、やっと機会が出来た、これっきりなんだ」

体中が震える、今から行うのは敵う筈の無い戦いだ。

だがそれで抗うことを止められない、男は足掻くしかない。体中を震わせながら、剣を握った。

そうして室内の中で軽く振り回す、たった一つ彼を裏切らなかつた努力の結晶だ。だがその全霊を尽くしても彼はきつと勝てない。

「これつきりなんだ」

絶対に、どれだけの力を尽くしても妹とでは才能の桁が違う。だが負けるつもりで彼はここにはいない、抗うのだ必死に彼はそれしか出来ないから。

嫉妬なんて本来悪い感情ではない、醜い訳でもない、当たり前なものだ。当然の代物なのだ、隠す隠さないはあつたとしても、それは運命に唾を吐くように当たり前前の行為。

ただその感情を扱う人が悪いだけに過ぎない。

それを彼は穢れだと思つてしまふ、綺麗なものを見続けたから、美しいそれを見続けたから、完全完璧を見てしまったから。

この世の穢れを受け持つたとしても言うように、彼はただ嫉妬で妹を殺す。

「この世に完全な物なんて無いって証明してやる」

絶対に負けるであろう今からの戦いを超えるために。

一章 御前試合前夜（後書き）

すでに狂った人間しか居ない気がする。

二章 白刃すらまだ遠く

酷く体が火照ってしまふ。それはきつと寝る前に軽く振るった剣が、まだ足りないかと騒いでいるかのようだった。

その剣のみだらな誘いに、自分の体から溢れる火照りを覚まそうと、侍女に話を聞いて訓練所に向かったセンセイだが、先客が居たのか、やけに騒がしい。

明日のためにと体を休めているものの法が本来なら多いはずと考えていたが、物好きはどこにでも居るようだ。

そんな風に考えて笑みをこぼした。

だがそんな物好き、普通ならいやしないということに彼は気付くべきだった。彼と同じくらいまともじゃない人物なんて、たった一人だけなのだ。

「やっぱり、お兄様だー」

妹、それぐらいなのだ、これからを考えれば、その程度が支障にならないものなんて、目の前の軍神ぐらいだ。間違いなくこの御前試合の勝者となる少女、油断があるうとただ勝利をつかむ化け物。

純粹無垢を極めたようなそれは、久しぶりに会う兄にまで、輝くような笑顔を見せる。

彼はその表情を見るたびに、劣等感に苛まれ、何も喋れなくなる。その対比にさらに彼は嫉妬心をあおられるというのに、彼女の笑顔には何一つかけりが無い。

だから自分が醜いと植え付けられる。

「お久しぶりですお兄様、アイシャは元気でした。お兄様はどうでした」

そして彼にささげる純粋な好意、打算すらないその信頼だけを固めたようなそれは、完全に彼が妹に抱く感情の反対であった。

なんとぶざまな様だろう、妹を殺すと息巻いて、この男が出来るのは、圧倒的なそれに何一つ出来ないのだ。見苦しく妹の美しさに嫉妬して、罵倒の声すら上げられない。完ぺきなそれは、彼という存在を居るだけで痛めつける。

「げ、っげん、元気だったよアイシャ、ひ、ひさ、ひさし、ぶりだね。お前に会いたくて、会いたくてさ」

殺したくてさ。

言えなかった、そういえばきつと妹は、悲壮な顔を彼に見せてくれるというのに、その太陽に陰りを入れる事だって可能だったはずなのに、そんな裏のあった筈の言葉に、光るように笑顔になる妹は、彼に抱きついてきた。

兄の優しい言葉に、子供のようにはしゃぎ様だ。

それが本来なら人を魅了する力になるのだろうが、その目の前の男には猛毒だ。なぜ違うと、なぜこんなに自分とこいつは違うんだと、泣き叫びそうになる。

同じ種と腹から生まれた二人のはずなのに、二人はあまりに対極過ぎた。優れた、いやはつきりというなら、その汚濁のような心と無垢な心、その差は一体どこにあったと。

認めてくれとって変わるようなものじゃない、彼女のうちから湧き出るその美しさと、自分の醜さの差は一体なんだと、何度叫んでも足りないほど彼は心で叫んだ。

戦うまでも無く心を折られたセンセイは、感情を振り乱し泣き叫ぶ、心が抉れても、笑顔のまま歯を食いしばる。

「アイシャも会いたかったんだよ。ただよく分からないけどお父様が会わせてくれなかったし、すごく寂しかったけれど、お兄様もそうだったんだよね」

「ああ、じゃなかったらあんなことしないさ」

ただ言葉に出来ないのだ、この妹の前だと、心では違うというのに、純粹無垢なそれを汚すなと頭が命令でもしているように、彼は何一ついえない。

ただ妹の言葉に喜ぶような言葉をオウム返しするだけ、それはきつと今まで刷り込まれた何かだ。

彼はうけたことがないのだ、ただ純粹な好意は、彼女以外では向けられたことすら少ない。

「傑作だよ」

ポツリと呟いた言葉に彼の全てが混じっている。

本当に自分は嫉妬だけだったと、そこにある太陽は、自分の影さえ埋める。もし彼に見方が居るのならきつとそれは妹なのだ。

彼の言葉に首を傾げて見せるが、ああなんて綺麗で綺麗なんだ。

優しく頭をなでてみるが、心には嫌悪感しかないというのに、顔は優しく笑っているようだ。これは呪いの様だ、何一つ自分の行動がうまくいかない、そんなのあたりまえだ、世界は彼女を中心に回っているようなものだ。

その辺の路傍の石が、自己を主張したところでその程度、汚濁はただ粛々とその太陽に焼かれて燃え尽きればいい。

「わかってたけど、お兄様も珍しいよね。普通はこんな時間に、しかも御前試合だっていうのに、訓練所なんて」

「気がはやって、少し剣でも振って心を落ち着かせようかってさ」
擬態である言葉遣いはもはや彼女の為だけにある。

父親を前にすればたやすく裏返るはずのそれは、一向に脱げる機械は無い。それどころかそれが当たり前にすら変わりそうであった。

「私はね、お兄様に会えそうだったからなんだ。だってお兄様はいつだって素振りばかりしてたから、絶対にここに来ると思って」

だからであった時はやっぱりだったのかと彼は思う。

あの頃から自分の根幹は何一つ変わらず、妹に読まれていることを再確認して、体が震えた。

多分だが彼はあまりに妹を神聖視しているのだろう、だからそ自分の行為を読まれるたびに、心が冷えて泣き叫びそうになる。だが彼は病的なまでに昔から、手に持っている剣を振り続けたのだ。

彼に近しく、その行為を見た人間ならある程度は予想がつくはずなのに。

そんな事実さえも見えなくなるほど、彼女に押しつぶされていた。

「それで、お兄様がどれだけ強くなったか、私が試してあげようと思つのです」

訓練所にある当たり前の刃引きした剣、身長が低く小柄なアイシヤにとつては、それさえ体には余るはずなのだが、剣に羽でも生えたかのように、軽々しく扱っている。

彼はかつて見慣れた光景ながら、喉から呼吸の機能が失われた。心臓さえ動いているのか分からなかった、恐かったのだひたすらに、

それこそ今までの彼女に対して行った行為のすべてを超えて。

蛇に睨まれた蛙しかなかったのだ。

震える、ガタガタと体が震えて、何一つ殺意を向けられない。

なんと、なんと、なんとまあ。

そこには魔剣を殺した時の余裕すらもない。その威厳のかけらすらも見ることなく彼は心を折られている。震えるだけ、また容易く絶望させられる、だが震えながらも武器を手にすることだけはできた。

この努力に付き添った剣だけは、彼が彼を裏切っても裏切らなかつた。

だがそれまでだ、折れた心そのまま構えて武器を振るう。それが本来の彼の力を発揮させるはずも無い。

「駄目だよお兄様、そんな構えじゃ弱いままだから」

ぶるんと、ただ剣を一度振って、空気を裁断する。

あどけないはずのその一振りには、ただ彼と彼女の差を如実にあらわし、果てすら遠いそれをただまざまざと見せ付ける。

才能が無ければ、きっと彼は蛮勇で死ねた、なまじ中途半端に才があるからこそ、差を見切って絶望する。

何一つ彼にプラスになることはない。

「ちゃんとお兄様を見せてよ」

その恐怖の呪縛を断ち切る事すら出来ないまま、ただ呻き声を上

げるように理合いもなく彼は武器を振るった。それは妹に促されたから、呪縛じゃない呪いに縛られたままなのだ。

そんな攻撃は意味も無く容易く、彼女にはじき返される。

裏切らない剣を裏切った男は、地面に最愛を転がし、ただ音を残響させる。流石に兄のその姿に落胆したのか、明るい顔に陰りが出ているが、ようやく彼が望んだ表情だったのかもしれない。

ただ呆然と立ち尽くす彼は、何一ついえない。ただあまりにもぶざまな自分に嘆くだけだ。

「いじわる、秘密なんて家族にしちゃいけないんだよお兄様」

しかし言葉を返せるわけも無く、ただ響いた言葉が絶望に変わる。彼女はプラスのほうに考えたのだろうが、今の彼の全身全霊だった。心神喪失状態ではあったが、それでも恐怖に促された男の必死ではあったのだ。

もし立場が逆でもそうだったと言い切れても、じゃあお休みなさいと、訓練所から消える妹に、ただああと返して。

そこでようやく涙が溢れた。

「あれは、なんなんだよ俺」

なんなんだと、ただであっただけで心を折られ、無様を繰り広げただけ。

何一つ出来ずに、ただ怯えて自爆して剣を裏切った、裏切らないそれを自分が裏切ったのだ。

「口だけじゃないか、何一つ、何一つ」

殺したい妹のご機嫌伺いに、上っ面だけの家族の団欒。ただ妹の為だけに、自分は一体何をしているのかと、言っても届かない。

剣を拾い上げ、剣を振る、ただ涙を流して、妹に負けたあとはいつもこうだったと、それに意味が無いのかもしれないと思いつつも。

「何も出来なかった」

握る手が強くなる、だが彼はまだ何一つ変わっていない。

それを超えなければ彼に勝ち目などあるはずが無いのだ。刷り込まれた心さえも踏み越えなければ。

「何も、これじゃあペテン師のやり口だ」

所詮それは口先だけの男の戯言に過ぎない。

今彼はそういう男だ、格好をつけるだけつけて、標的に会えば怯えてただの人形と化す、言葉の重みも価値もない。

彼が殺した男の価値さえ下がってしまう。

地面に溢れる涙は、悔しさからいつの間にか謝罪に変わっていた。ぼつりぼつりと、謝罪がむがれ始めていた。ただ素振りを続けながら、ごめんなさいという声が響いていた、こんな無様な男に殺されて、口だけの男に殺されて。

「ごめんなさい、認めてくれたって言うのに」

頑張つて見せますから、頑張つて頑張りますからと、彼は必死になつて叫んでいた。

どんなに折れても惨めでも、諦める事だけは決してしませんと、もっと無様なことがある、もっとマシになつてみせる。

「あなた達を殺した男は劣らないと言わせるようになりますから」

だから見ていてくれと、殺した人々にそう願う。

人殺しが独善的に呟くのだ。それはもしかしたら自分を救う為の逃げの言葉なのかもしれない。同時にそれ以外の別の言葉なのかもしれない。

だが彼は必死であったのは間違いない、殺した命を背負うことが出来る人間はそうは居ない。だがそれを背負う為に努力していた、どれだけ無様で惨めであっても、死体をあさる様に似ていたとしても。

「頑張りますから」

間違いなく、諦めようとはしなかった。どれだけ吐き気がするほど無様なその性根であったとしても。

決意の意味さえ分かっている、ただ諦めない習性を持つだけの人間は、何度もそう呟く、頑張りますからと、諦めませんからと、それだけを生きる糧にしているように。

「絶対にあいつを殺しますから」

勝てもしないその心の弱さで、一体何が出来るといつのか、だが床にこぼれた涙はいつしか乾き、剣の音は一層力強いものに変わる。それが彼が出来るただ一つの方法で、それ以外何一つ思いつかなかった彼の謝罪の仕方なのだ。諦めずにただ武器を振るう、もう父親との戦いが迫っているというのに。

だが間違いなく、それが始まる前に、諦めることなく立ち上がることだけは出来たという証明になった。

二章 白刃すらまだ遠く（後書き）

一章で、でかい事といった主人公の心をすかさず折る。なんかこう惨めだと楽しくなってくるよね。

三章 前夜もう一つの決意

お兄様に会ってきまして、アイシャはそう楽しげに父に向かって答えた。

その時薄らぼんやりと浮かんだ父の憤怒を彼女は見逃したようだが、彼女はその詳細を楽しげに父親に告げる。

かわいらしくただ、お兄様が意地悪だったとか、私に会いたくなくて着たとか、そんな聞きたくも無い言葉を聴かされて、内に酷い嫉妬が混じる。本当なら娘の口から他の男の言葉すら聴きたくない父親は、自分の浅ましさを責任を息子に押し付けながら、必死に表情に悪意を見せない。

自分の悪ですら彼女をけがしたくないと必死なのだろう。

すでに娘と関係すら持った男が、いまさら何を汚さないと言うのか追及してやりたいところだが、彼にとっては当然の事に過ぎない。ただ羨ましいのだ、無償の優しさを受け取る男が、ただ純粹無垢な愛情を与えられる男が、それは自分だけでいいのだと彼はそう思う。

五十を超えた男の発想かと、自信姿酷く無様に思いながらも、その考えを捨て去ることは永遠に出来ないのだろう。彼もまた彼女を偏愛し、敬愛し、何よりただ愛している。

自分の娘をただ彼は愛してしまっている。誰に取られたくないからと、関係を持って自分のものにし、それでも何の陰りも見せない娘に、彼はただ愛情を傾けることしか出来なかった。

こうやって彼女に無償の好意を向けられる男はそう多くはない。

純粹無垢の愛情を与えられるものなど、ただ彼女に屈服する機能しか誰も持たなくなるだろうと思うほどに、目の前の少女がただ全

てが美しかった。

そんな愛情を向けられることすら殺しても殺したり無いというのに、センセイはそれが許せないのだ。その無様な才能と感情が、彼女に何一つ届かないというのに浮かぶ、光の中の醜い影。

光を妬むただの悪意。

そんな悪意が彼女と出会ってみれば何も出来なかったという。分かりきっていたことだが、ただ絶望したのだろうと、ひたすらに彼女を見て食いつぶされたのだろうと。

父親は全てを見通したように確信する。そして無様に今も剣を振るっていることだろう、あの駄作はその辺りまで何一つ変わっていないと。

悪意は才能はあっても、心が破滅的に弱い、と言うよりも目の前に居る可憐な娘に対して、何も出来なくなるのだ。

そう刻み付けたのは、母の呪いであるのだが、あの破滅の魔女のずいぶんと粹な事をする、妻であるそれに彼は賞賛さえ送ってしまう。娘の才に気付いた時点で、障害となる息子を完全に潰そうとした母。

呪いのように妹の前で何も出来なくなった理由はそれが一因ではあるのだろう。

そうやって刻まれた心の弱さが、さらに彼を追い詰めているのだろう。目の前ではしゃいで兄の報告をする娘の姿が、その無様な兄の報告ばかりで、流石は駄作と褒め称えたくなるほど哀れだった。

「ただお兄様、私の見た感じだと、お父様より強いよ」

不意打ちとばかりに伝えられた言葉に、流石の父も目を剥いた。彼女の見立てが外れるはずが無い、自分と並ぶ雅語と記載を持つ

ていることは知っているが、彼は負けるなどと考えたことも無かった。

そんな余裕すらあったと言つのに、娘は容赦なく事実を告げた。

「だつてお兄様、手加減してるはずなのに、次の太刀がきてたら私は間違いなく怪我したもん」

彼とて娘に一太刀入れることすら出来ないと言つのに、悪意はそこまで踏み込んでいると言つ事実が、父親である彼には有り得ぬ話と言ひ切りたい代物であつた。

だが娘は間違えない、彼女が言うのなら間違いなくそれは達成された代物だ。心の呪いさえも引きちぎり、彼はその場に立てると言う可能性を見せ付けていたのだ。なんと言つことだと、初めて息子に対して嫉妬以外の気持ち湧き立つ。

尊敬ですらない、ただの恐怖だ、汚濁が娘を怪我す可能性が出てきたと、いかめしい顔が青くなって、普段なら見せない狼狽を明らかにしていた。

そんな尋常ではない父親の姿に首を傾げて見せるバンビの仕草は、可愛くはあつても流石に父親の同様に消せるほどではない。彼女は国を落とす時ですら、傷一つ無かつたような存在なのだ。

それはもはや彼にとっては神の冒瀆に近い。

「それは本当なのか」

「うん、お兄様絶対に強くなってるよ。本当に、私にあいに来てくれたんだと思うと、凄くうれしいんだ」

駄作が、駄作がと、怨念のように喚き立てる心など彼女は知らないだろう。

殺してやると言う感情が悲鳴のように心の中に沸き立っている。
男の嫉妬の見苦しさは、彼といい父親といい何ぼと変わらない。

ともども無様だ。

「そうか、そうなのか、あいつも頑張っていたのだな」

言葉との表裏を見れば、父親としての顔すら分からないだろう。

彼女の前では絶対に見せないと決めたその悪意は、光のような彼女の前からこそ逆に、極色彩に塗装され尽くして、彼の内側が明け透けに見えてしまう様にさえ思える。

太陽が影が見えないように、彼女にはきつとその色は見えないのだろう。人の心のうちにあるその汚濁を、ただ彼女が人を怪我すように、楽しげに何度も兄のことを父に話していた。

「そうなんだよ、だから一緒に暮らせるようになるよ。また家族四人で」

「駄目だよ、それは駄目なんだ、あやつはすでに男爵家の人間、没落したとはいえその当主なのだよ、家を持った男が、実家に戻るなんていうのは、お前の兄上を侮辱しているような行為だよ」

あれと暮らす、考えるだけで気が狂いそうになる。

少しばかり彼女をとがめるようにじつと目を合わせて、そのたびに内に燻る嫌でも分かる嫉妬を必死に隠そうと足掻いている。

目の前に息子がいようものなら間違はなく、鼻で笑うような隠し方だろうが、この大事な人を盗られてなるものかと、男は無様に否定を繰り返していた。

「え、そうなの、そうだよ、お兄様も家を受け継ぐような人になつたんだ。そうかそれでこの御前試合で力を見せ付けて、お家の復

興を考えているんだ」
「そうかも知れんな」

たしかにここで自分を倒しでもすれば間違いなく、男爵家は復興できるだけの名誉を得ることは出来るだろう。

むしろそれが目的であれば逆に、こんな気持ちを彼が抱くことも無かっただろう。

凄い頑張りやさんだお兄様はと驚いた表情を向けて、そんな事を彼女が言ったびにこの男は胸が締め付けられるようだった。

何でそうやってあれを褒めると、お前が口にしていいのは私だけの筈だ。

心の中で何度そう悲鳴を上げているのだろう。それを表に出さない態度は以上とも思えるほどだ。

「じゃあお父様も頑張らないと、十分に休息をとって、お兄様を助かす気で行かないと、男爵家の復活も無いんだよね」

明日殺すと断言している息子の為に、十分に休息をとる。確かに理にかなっていると言いたいが、彼は震えていた彼女の言葉に。

自分はその男に負けるかもしれないと言う事実を口にした娘の言葉に。あれに家族に対する慈悲は無い、明確に殺しに掛かることぐらい理解していた。

そうなれば目の前の娘の甘やかな体に触れる事すら出来なくなるかもしれない。そう思うと気付いた時には彼女の体を抱きしめていた。

「止めておけ、そういう事は、あまり言うものじゃない」

「んーけど今日は駄目だよ。そういう気分じゃないもん、なんかお兄様にあって体が暖か、ん？んーん」

喋らすものかと唇をふさぐ、あれの言葉なんて聴きたくないのだ彼女の口から。

困ったように声を上げる彼女の声を聞いても止めることにしか必死になれなかった。まるで白い着物に墨汁をたらすような様相、手の平の窪みから甘い痛みがこぼれて足の先に伝わるような、酷く緊迫した線のような快楽が痺れを持って伝わってくる。

くるしーと言っているのだろう、彼女の視線を見ても、今だけは彼女の瞳には自分しかいないと思うと、年甲斐も無く胸が勝手に呼吸しているような温かさを感じてしまっていた。

大切なのはお前だけなのだと、彼は心で叫ぶ、お前以外は必要ないのだと、彼は心で叫ぶ、口に出来ないその言葉を彼は叫び続けていた。

それを口にすればきつと彼と彼女は終わるだろう。元々が終わり果てたような関係だ、簡単に破滅してくれるのだろうが、だからこここまでしておきながら、娘を愛した父親は、その最後の一線を越えられない。

娘を抱いた男はそこまでしても言葉だけは使えなかった。

それは世間体などではない、それを言えばきつと彼女が穢れるから、自分が大切に思い続けた少女が汚れてしまう。

その太陽のように笑う笑顔を陰らせてしまう。

彼はそれが恐くて仕方が無かった、こうやって口をふさいでいる自分さえも、本来であれば、自分で無ければその場で斬り捨てるほどに醜悪な行為。

困ったような顔をしながらでも彼女はこの行為を受け入れる。これも家族のスキンシップだと思っているのかもしれない。

何も知らないような聖女は、ただ笑顔で何もかもを受け入れる。彼はそんな彼女を優しく抱きとめながら、彼女が腕の中で身を擦っている、少し窮屈なのだろう、まだ生まれて数ヶ月のまるで綿毛のような子猫が身を擦る姿にも似ていた。強く力を入れるだけで、くしゃりと潰れそうな彼女の形はやわらかいけれどしっかりとっていた。

離してたまるかと、娘を強く抱きしめる。大切な人を彼は守ろうと、傷一つ着けてなるものかと決意する、それが息子だろうと世界だろうときつと代わらない決意になるのだろう。

そんな決意を彼女は知らない、そもそも彼女はきつとそんなことすら軽く踏破してしまうだろう。それでも彼は守りたいのだ彼女を、必死に必死に、ただ愛した人を、その思いはきつと彼女と同じぐらいに美しい思いだろうけれど。

それが人を救う言葉ではない。所詮それはただの宝石と同じ、実が伴わなければ意味が無い話。

「お父様、これでお預けです。ちゃんと体を休めて頑張らないと、本当にお兄様に殺されちゃうかもしれない。気の緩みは命を奪いかねないんですから」

彼はそれを用意できるわけもない、もうこの結末は明確に決まっているのだ。軍神に傷をつけることの出来る可能性のある男と、不可能な男、その差は間違いなく如実に現れる。純粹な実力の差と言う現実が、彼には待ち受けているのだ。

その思いが息子を殺すことが出来るのかは、それこそ神のみぞ知るといふ奴だろう。

「大丈夫だ、あやつに負けるつもりなどさらさらないのでな」

そういつて娘の頭をなでると、まだ冷めぬ自分の興奮をゆっくりと娘の笑顔で冷ます。

負けぬと、あれを殺して大切なものを守ると、震えだした体を必死に抑えながら彼は、その決意を新たにし、娘の甘い体を思い出して心を休めてようやく彼は、完全に眠ることが出来た。

三章 前夜もう一つの決意（後書き）

なんかおっさんの純愛を必死に書き続けただけっぽい気がする。

外伝 日記

届かない、何一つ届かなかった。

生まれて初めて妹と簡単な剣の稽古をしたのだけれど、僕は何一つ出来なかった。

簡単に剣をはじかれてお終わり、悔しくて涙が止まらなかった。

お父さん達は妹を褒めて、僕には何も言わなかったけれど、きつとすごく失望させたんだと思う。

ごめんなさい、初めて剣を持った妹に負けて本当にごめんなさい。妹にも今度からは負けないように頑張る家から、いっぱい頑張るから、少し僕のほうを向いてください。

パラ、パラと、誰かが日記を見ていた。一日おきに、一月飛ばしてみたなりと、少し悲しげな視線をしながらその日記をめくっていた。そんなにもその日記の持ち主がかわいそうなのか、内容がどんなものなのか。

また妹に負けました、悔しいけれど妹が強いことは、兄としてとても誇らしいと思います。

けどお兄ちゃんには妹を守るぐらい強くないといけないので、もっと頑張つて練習しようと思います。

最近はお父さんも剣を教えてくれなくなって、お母さんも魔法を教えてくれなくなりました。

妹はすっかりに教えています。けれど当然のことです、妹はまだちゃんと剣使ったことつが無いので、ちゃんと教育をしてあげないとどこかで怪我をしてしまうかもしれません。

そういうことをちゃんとお兄ちゃんとして教えてあげようと思

ます。必要ないかもしれないけれど、妹はそうやって周りの人にするという事を教えていける人になると思うからです。

ずいぶん優しい言葉で書かれていました。

その少年は結構まめな正確だったのでしょうか、ほとんど欠かさず毎日のように、日記を書いていました。

内容は妹と家族のことばかり、妹に負けたとか、妹はとても優秀だとか、自分はもっと頑張らないとか、お父さんともう一月以上会話をしていないとか、っそういう事ばかりが書かれていました。

その日記を見ている私はどう思ったのか一度、パタンと日記を閉じました。

そしてなんとなく適当なところでまた日記を開きます。

今日お父さんに剣の筋がいいと褒められました。

流星は俺の息子だって、持ち上げてくれて振り回されました。ちよつと目が回ったけれど、僕はお父さんの子供なのでとても誇らしかったです。

お母さんが教えてくれた魔法も、もっと頑張ってお母さんが喜ぶ姿をもっと見たいと思います。

今はお、僕の妹が小さいので我がままを言って邪魔をしてはいけません、妹も守れるおにいちゃんになるうと考えていっぱい頑張ります。

それはまだ妹が生まれる前の日記でした。ずいぶんと早熟な子だったらしく、だいぶ早くから日記を書いていたようですが、これも彼が非凡であったことの証明なのでしょう。

その手紙にはこれからの日々に対する希望が書き連ねてありました。

妹を守るとか、父や母などと、これから数年またげば、全てなかつた事にされるといふのに、それでも頑張ろうと日記に書き続けた少年は、ある意味では誰よりもまともではなかつたのかもしれません。

けれど幼い少年の心からの決意だったのでしよう。

みんなの為に頑張ろうと、僕が妹を守るんだと、なんとも素敵な言葉が書かれているではないですか。

それが終わるまでの彼の日記は、日々が輝いていたのかもかもしれません。

だってそれは彼が太陽だった時のお話なんですから。

まだ家族に太陽としていられた時、それがあなるなんて誰も思わなかつたでしょう。

太陽が尽きれば光もない塊です。

何一つなくなつた後の彼の日記はそれは、それは面白いことになつていました。

もう家族と話すことすらなくなつて、久しぶりに父上と話してみれば。

男爵家へ養子にいけといわれて、もう泣くしかなかった、そこまですらないと思われていなんて流石に、いやもう目をその事実を目をそらすことが出来なくなつた。

妹、妹が、あいつが居るから、あいつが生まれた所為で、そこまです僕は駄目なんだろうかと、ずっと頑張ってきたけれど、何一つあいつに届かない。

結局才能のある子供だけしか父上は要らなかつたのだろうか、母

上は必要なかったのだろうか、僕は、そこまで要らない代物だったんだろうか。

けれど、今日妹を殺そうとして分かった事がある、僕はもうここにいられない。

ここにいれば僕は何もかもが終わってしまう。次の家で頑張ろう、この家のことを忘れるくらいに家族を大事にしよう、妹を忘れるくらいいろいろな事をして、男爵家を発展させよう。

きっと要らない子供を押し付けられたのかもしれない、新しい家族を守るために頑張ろう。

このページはやけに皺でよれて歪んでいた。

泣き腫らしながら書いたのでしょうか、よっぽど何かに吐き出したかったのは分かりますが、これからさらに数年後の日記はさらに面白かったです。

もうかれはその時完全に終わってしまったのでしょうか、そう考えればあの御前試合の結末も分かると言うものでしょうか。

それが彼のかごが唯一分かる代物なのです。

それ以外はその時大体終わってしまいましたから、あの惨劇のあとに、あの御前試合は良くも悪くも歴史に残りましたから。

そして最後の彼の日記です。

もう殺そうかあいつ

ただそれだけでした、何があつたか分かりませんが、ただそれだけです。

結末を知っている身とすればなんと分かりやすく、なんとはた迷惑な言葉でしょうか、ですが同時に恐怖しかありませんでした。

なんでこんなことにと、何でこんな風にと、そう思うと恐怖がわいてくるのです。

その少年が壊れて崩れ果てるまでその様は、恐怖と言ふ言葉でしか表せませんでした。

彼がそんな風になつてしまつた完全な原因はきつと、ちょうど日記が終わつた時から始まるのでしよう。

日記が終わつた日、男爵家の没落こそがその完全な原因でしょうが、そこで何が起きたのか詳しい資料は残っておりません。

ただそこでおきたことで彼は完全に終わってしまったのだと、この日記を見た私は思わずには居られないのです。

外伝 日記（後書き）

外伝なんて書くつもりはなかったけれど、維持でも更新したくて無理やり書き上げました。

ちなみに何本か書くかもしれないし書かないかもしれないけれど、外伝は全部本編終了後のものです。それだけは間違いないと思いますよ。

四章 精神の薄氷

何一つ無い、何一つ彼の手には余る。

体力がなくなり倒れるまで剣を振り続けたそれは、訓練所で倒れているところを侍女に発見されるまで気付かれることは無かった。

注意されたがそ知らぬ顔で、なんか寝てただけでしょうと適当に返してみたが、発見者の侍女は顔を真っ赤にして起こっていた。

実はこうやって心配されると言う経験が無い為、冗談で和ませようと考えたようだが、すまない場合があることを頭に刻み付ける程度に社会学習するべきだと、なぜ酷く怒られた。

確かにあんなところで御前試合の参加者が倒れていれば、また参加者死亡と言う、不穏なうわさが流れ、今度こそ王の面子を潰しかねない。そうなれば本当にあらゆる方面で色々と笑えないことになってくる。

頭の回りは悪くないはずなのに、彼はそういうことにやけに無頓着だ。

どこか人生が壊れている人間だ、それは仕方ないのかもしれない。注意してくださいと当たり前前の説教に少しばかりうれしくなったのか、悪かったと珍しく仏頂面から朗らかな笑顔を見せていた。

その時侍女が目が赤いけれど大丈夫かと言ってきたのだが、それは単純に泣きながら素振りをしていた所為なので、少し腫れぼったくなって居たりしたのだが、次女はそれを心配していたようだ。

だが流石にそれは男の子だったようで、恥ずかしがりながら視線をそらして、色々あったんですとしかいいうことが出来ず、昨日を思い出して少しばかり困った表情になる。

「僕だって男の子なんです」

などと稀代の名言を吐きながら、侍女から逃げ出した、妹を殺すと息巻いてた男は、その事実の説明をしたくないがために、己の身体能力の全てを駆使してその侍女を振り切った。

結局そんな試合前に起きた参加者の不祥事は、そんなのりもあって騒ぎになる前に終わったのだが、あれだけ震えまくってたくせに、今はずいぶんと余裕があるものである。

彼が言うには男の子らしいので、これ以上は追求してやらないのが優しさなのだろうが、この御前試合が終わるまでの課題が一つ分かった気がした。

「心が弱い、あまりにも弱いんだ」

才能じゃない、負け犬根性が染み付きすぎている。

原因は過去の事であるのは分かっていたが、ここまで酷いとは思っていなかった。思い出すだけで菌噛みするのは仕方の無いことだろう。

弱いと、自分は弱いと彼は、自虐しつづけ、自嘲を極めて突き抜ける。

乗り越えないと思う。そうじゃなければ彼は何一つ始まりもしないと、小手先だけが身についたって、ここぞと言う時に崩れるなら彼にとっては価値の無い代物だ。

「古傷が痛むな、心も体も、あいつと当たるまで三日、無理難題過ぎるだろう」

見ただけで心が潰れて死んだのだ。

どうすればいいんだと泣き叫ぼうにも、今までの人生でそういう事を相談できる相手もない。

人とのつながりと言う意味では希薄すぎるだろう、一人の殻にこもることしか出来ない。彼はそれぐらいしか機能を保有していないように、周りとのつながりがある一つをおいて断絶していた。

その繋がりが妹だけと言う、なんとも酷い人間関係。妹なんて好きでもないというのに、過去から全てつなげて結局残ったのがそれだけ。

彼が終わってしまったから、残ったその絆を断ち切る為だけに動いていると思えば、もうこの終わりがどうあれ、彼はきつと何も残らないのは間違いなかった。

もう剣だけを振る人生に変わるかもしれない。本当に極限まで人の絆が薄れたら、最後に残るのは手元に残るそれだけだ。完全に孤立する為だけに動く人など、その行為全てが破滅だ、残るものなど何一つ無いのと変わりは無い。

そんな事を彼が考えると、自分はもしかして死にたいだけなんじゃないかとすら感じてきてしまう。

それぐらいには、彼には何も無いのだ。

妹を超えたいんじゃない、ただ殺したい、復讐ですらない。ただ殺そうと考えているだけでここまで来てしまった彼だ。

けれど、彼はそれでもよかった、残らないことがじゃない。

妹を殺すことだけでよかった。それぐらいに何も残さなければ、あの化け物には届かないのだと確信していた。

妹、妹、妹と、それだけしか彼には無いほど、彼の頭には妹しかないのだ。

だつて今まで父親の考えが出ることにすらない。剣聖のことなんて最初から眼中に無いのだ。そもそも次が父親であるかすら彼は気にしていないのかもしれない。

商店に定まつた妹だけを彼は見据えている。他の誰にも負けるわけがないと言ふ発想は、父親の決意を軽く罵倒しているだろう。だが今まで彼にそういう扱いをしていたのは父親のほうだ、自業自得であつてもそれ以上ではないのかもしれない。

「強くないと、本当にそうじゃないければ、戦う前に終わってしまう」

それよりも戦う前に壊れてしまう自分が恐かった。

またあの醜態を晒すのかと、そう考えるとたっているのすらあやふやになる。あの笑顔が彼を押しつぶしてしまうと思つほどに、手が思い出すたびに震えている。

死んだものにしか絆と呼べる絆の無い男だ。

しかも殺したと言ふ言葉ついて完成するような代物。

ましてや最後に殺した男など、自分を最後にまで褒めて死んでいったような傑物だ。彼の重さが一番つらかった、あなたを殺した男は恐怖で動けなくなります。

そんな事があつていいはずが無いのに、事実そうで、そのまま壊れてしまいそうになることが、あまりにも殺したことにすら無駄と言つているように感じてしまう。

殺した責任の重さ、自己の満足の為とその為に殺したからこそ、彼はそれにとらわれ続ける。たぶん根が優しかったのだろう、だからこんな事さえも抱えてしまう。

さばさばと割り切つてしまえばこうもならなかったのだろうが、そうなるには彼は優しすぎたのだろう。だがそのおかげで足掻いて

いられるのかもしれない。

強くなるうと考えるけれど、心を鍛える方法なんて分からない、いつものように剣を振って何かが変わるわけじゃないのだ。百年たとうと何も変わらないかもしれないけれど、いつかころりと変わっているかもしれないのが心って奴だ。

足掻いてやると思う、彼にはそれだけしか機能が備わっていないのだ。頑張ろうと言い続けて実行するだけ、課題はあるがどう乗り越えるべきなのか、探し必死になるのも糧になるのだろう。

必死になっている、あの無様はもうしないと心に剣を打ち込んで、自分の生涯を相手に刻み付けてやると、お前の完璧さなんて俺は許さないと言い張る為に、今度こそ、そう本当に今度こそ。

「出来るのか」

出来るのだろうか本当に、どれだけ思い決意も力の前には轢殺されるのが当たり前間の帰結なのだ。

意思を張る為の力が泣ければ、どれだけ確固たる意思が在ろうと価値があるはずも無い。妹を殺すほどの意思があるとして、妹を殺せるほどの力があるのか。

「あーもう、何を考えても悪いことばかりだ」

泥沼だった。悪いことばかり思いつく、たぶん妹と言う存在を完全に認識してしまった所為なのだろう。

一つ決着をつけても、また一つ問題があがって、それが全部、全部、心の問題なのだ。

いまさら力がつけられたとしてもある程度、心に問題があるのだ。泥沼のようにはまるマイナスの思考、これなら剣を振っているほう

がましだと思うが、また訓練所で県でも降って居ようものならあの侍女が飛んできそうな気がした。

そうなると流石に困る、御前試合が始まるまであと数時間。寝るにしても微妙な時間は、彼の日々の生涯でも珍しい手空き時間と言ふ奴だった。頑張ると言う言葉だけで生きてきたような人間なので仕方ないと言えば仕方ないかもしれない。

何もしないと言うのがどうにも苦手なのだろう。

無駄気思考を重ねて泥沼状態に陥ったりと、時間を作ると悪い方向にしか進まない典型は、マイナス思考の塊となりつつあったが、何かしようと考えて、辺りを見回してみるが、さほど自分の暇をどうにかしてくれそうなものは無かった。

やっぱり素振りかと考えても見るが、あんなわけの分からん言葉を言つて逃げ出した手前、なんと言うか気まずいと言うか流石に彼も顔をあわせづらい。

羞恥心が無いわけでもないのに、人並みに感情がある彼には流石につらいのだろう。自分のいった言葉のないような無さを考えれば仕方の無いことだ、意味が分からない。

これから一体どうしたもんかと、首を傾げながらとりあえず自室を目指してみるが、途中声を掛けられた。

「おや、魔剣の頑固者を殺したつて奴じゃないか」

それは神童と呼ばれた南方の守護者、彼の妹ほどではないにしても、才能だけなら豊かな北と南の太陽だ。

だが彼にはあまり興味の無い話だったりする。彼と彼女ではあまりにも差がありすぎた。

「あ、どうも」

「そう薄い反応だと悲しくなるじゃないか、こっちはあの魔剣を殺したって言う剣士がどんな人物かって楽しみにしてたんだぞ」

部屋に行ってもいないし、探してたんだと、楽しげに肩をたたいてくれた。

彼は魔剣のライバルと呼ばれた天才だ。だからこそセンセイに興味を持ったのだろう、人たちで自分のライバルを殺し、傷一つ負っていないというのだから。

「どうやって殺したか、なんてのは御前試合があるから聞かないけど。あいつ満足して死んだのか聞きたくてな、実はあいつを殺すのはきつと俺だなんて思ってたからさ」

「殆ど不意打ちですよ、見事なんていつてくれましたけど、まともな闘いなんか最初から用意してませんでした」

どうしても出たかっただんと、彼は言葉をつなげた。

だが逆に彼は驚いた様子で先生を見ていた。

「あいつが見事だつて、お前よっぽどじゃないか。あの頑固者が人を認めるなんて、よっぽどの使い手だぞ、こっちは馬鹿馬鹿と言われ続けてたのに」

ただ賞賛で彼を迎えた神童ヒルメスカ、罵倒さえ覚悟していたと言うのに、故人を知っていたのだらう逆に驚いて見せてくれる。

殺した相手から繋がった縁、それに驚いたままの先生だが、それがつながりとなんて思っても居ないのだらう。

「楽しみになってきた、軍神はちょっとつらいが、一つ目標が出来たってもんだ。二回戦で順当に行けば俺とあんたが当たる、その時

に存分に語ろうぜ、剣聖なんか打ち倒してくれよ」

すぐくうれしそうに笑った、絶対に負けられないから次の戦いで会おうと、そんな事を言ってくれた人間は居なかったのだ。

ほほが緩むのがわかってしまうほど彼は笑顔だったのだろう。

「分かりました、負けるつもりはないので気にしないでください」
「その時には不意打ちじゃないと、どれだけ魔剣が強かったか教えてやる。あいつと同格の俺だからな、絶対に見せてやれると思うぞ、あんたのその暗い顔を晴らすぐらいには、こっちにもいい目標になるし一石二鳥だ」

だがあんたも相当強いのは分かるさと彼は言っていた。

魔剣相手に人たちが決着できる腕前、ましてや日々が戦場と言いつ張っていた魔剣という男の不意をつくなんて異常を成し遂げた偉業に、ヒルメス力は感動しか出来なかった。

だから彼にとっても倒すべき目標が一つ出来たのだろう。

目の前の剣士、魔剣を倒せるだけの實力を持った存在。自分の目標がまた定まったと喜んでいた。

しかしそんな褒め称えるべき目標は、すぐくばつが悪そうに呟くのだ。

「目標にしても、意味無い。あなたや魔剣のほうがよくばつが強いよ」

それに目を丸くした神童の姿があったが、そのあとに困ったような顔をしたまま、視線を左右に動かして動揺している発言の主に、腹を抱えて笑うしかなかった。

見当違いの発言でもしているようしか聞こえず、彼の言っている言葉がやけに子供っぽく聞こえたのもそうだろう、目の前の魔剣を

殺したセンセイと言う男は、自分に自信が無さ過ぎた。

「こっちの勝手だ、そう思えるからこっちがそうするだけだ。あんたはあんたが思うよりは間違いないくらい強いんだよ」

一体どれだけ上と比べてるんだと、目に涙を浮かべながら笑って、先生に視線を合わせて肩をたたく。

少しばかりその手の力が強かったのは、魔剣はあんたに負けたんだと、あんたが自分の言葉を否定することだけは許さないと言う意思があつたのだろう。そして同時に、それだけ魔剣を認めていたと言う感謝もあつた。

「そこまで自分が信じられないなら、俺と戦って勝ったら強いつて信じろよ。負けたらそのままでもいいさ、あんたが強いって言う男が言っただそれで十分認められるだろう」

これから殺しあう相手に彼は、進むべき言葉を与えて、頑張れなんて告げていた。

こっちは全力であんたとやりあいたんだよと、格好をつけて気取ったように言ってくれやがった。

四章 精神の薄氷（後書き）

なにこの神童の快男児ぶり。

五章 御前試合開幕

俺の言いたいのはそれだけさと、一人あまりにも清々しい男は去っていった。

いもうつと同じように輝いているはずなのに、彼には驚きしかなかった、ひとつとして悪いと思うことが無かったのだ。

綺麗な人間の筈の神童と呼ばれた男、だが妹に感じたような嫌悪感は一切無かった。

同じ存在の筈だと言う彼の疑問を解消するものなどいない。

それが気づけるようになればきっと、自分の何かが変わるんじゃないかと、彼の戦いを心待ちにしている自分が居たことに彼は少しだけ驚いていた。

今までの貪欲などす黒い執着じゃない。

何か別の感情に酷く戸惑っているようにさえ思える。

人との繋がりが出来て、初めて知った戸惑いは、彼にはあまりに刺激的過ぎて、ここに着てから驚きしなくなり、いつも何かに怯えて戸惑いあせっている。

ここに来るまで、彼が何をしていたと言うことは無い。ただ武器を振っていただけ、そんな人間の触れる絆は、全てが色を変えて新鮮なものではあったが、膨大な人という情報量は彼をどうあっても困らせる。

優れた人間かもしれないが、人の機微とは所詮経験だ。それ超越できるものはただ反則じみた魅力で人を捉えるような彼の妹ぐらいだ。

それ以外の人間は、ただ人と付き合いその中で得る経験で、それ

を手にするのだ。

その経験の無い彼は、戸惑うしかない。人と話しかけることすら難しいかもしれない、用は対人恐怖症の一手前、それ以前に人の会話と言う行動を理解していないかもしれない。

それぐらい彼は、人と人の繋がりが薄い。

同時にまた会いたいと思ったのは、ある意味では妹だけ、きっと魔剣もああいう人物だったのだらうと思うと、自分がなぜちゃんと剣を合わせなかったのかという後悔さえ芽生えた。

神童は妹とはまったく違う、なぜ会いたいと感じて、また話してみたいと彼は思ったのか。

それはきつと魔剣と同じく、彼らがセンセイのあこがれた存在だからなのだ。ああ生きていられたらきつと自分は、妹を殺そうとなんて考えなかったらだらうと、それぐらい彼らは強かったのだ。

「うらやましい、な」

それが多分彼が最も欲しかった強さなのだろう。

今際の際にすら人を認められるような人間、しかも卑怯な手で殺された相手にすら、だから彼は魔剣の死をいまだに引き摺り歩みを重くし、同じような人間を見て羨ましいとこぼす。

僅かに鈍く痛む心は、きつとそれを妬む気持ちだ。

なんでなんだと、なんでこっちはそのなれないんだという。彼の抱えた嫉妬と言う気持ち、羨ましくて仕方が無い。

何であんなに、なんであんなに、何もかもが妹より綺麗に見えてしまうんだらうと、そしてそんな彼らに殺意よりも、尊敬が先にたってしまう。

「あの人たち反則だろう、ずる過ぎる、あんなのどうすりゃいいんだよ」

心臓をつかむように胸をつかみ、何で強くなってくれないんだと叫び散らしたくなる。

自分の弱さなんてしっている筈なのに、光があればあるほどやっぱり自分が穢れて見える。

この惨めな執着心、どれだけ太陽を見ても帰ることの出来ない感情、嫉妬と言っただけのそれは、彼が生きる意味にすら変わっていた。行動原理の全てがそれに集約していくほど当たり前の行為。

だからこそ、それしかない自分が汚らわしく見えてしまう。

羨ましいと呟き、羨ましいと嘯くようにさえ感じる、本当に羨ましいのかと自分に問いただすように。

分かっているのだ、彼だって自分の心の弱さは、この溢れている嫉妬。どう会っても消せない悪意と言う悪意、妹から生まれたそれは、彼らのようには生きていられないと言う事実の証明だろう。

だから羨ましい、ある意味では妹よりも手の届かないそれよりも、本当の意味で手が届かないと知っているから。

自分はあるなれない、なれる筈が無いのだ。

それでも彼は待ち望んでしまっていた、自分がなり勝った人は一体どんな人なのだろうと、所詮は揃いも揃って剣でしか語れない者達、だからこそ万の言葉よりも剣で語り合いたい。

「勝てる気がしないんだもんね」

試合では負ける気がしない、勝てないとは思わない。

だが勝ったということができない、きつとそんな闘いになる。後

に残るのは魔剣と同じ時の喪失感だけ、喜んだあの時と同じ何かが消える感覚。

ポツリと呟く。

「頑張ろう、頑張ろう、じゃなけりゃ殺したことすら無駄になる」

そう言い聞かせる言葉は自分が自分を保つ為のいいわけだ。

今は弱いんだから仕方がないと、そう言い訳のためだけにその言葉を使っている、そう彼と話してからは思うようになってしまった。渦巻く思考のマイナスに、どうやったらいいんだと悲鳴を上げたけれど、それを受けれてくれる人間はどこにも居ない。

死ぬまで苦しみと言っているように、心の中にまた一つたわみが出来て、何かが歪む。

けれどももうそうやっていいわけが出来る時間は少ない、立ち上がって歩き出すしか許されない、時間はそこまで彼を追い立てているのだ。

あと少しの時間、それで彼はこれ乗り越えて歩かなくてはいけない。

自信の決意がそれほどに弱いものだと言いつ張るわけにはいかない。いまは、今はまだいいかもしれないが、そうじゃない時がもう迫って追い立てる。

その時自分は剣を握ることが出来るのだろうか、妹よりも前の尊敬すべき相手に、自分は剣を向けることが出来るのだろうか、途方に暮れる。

弱すぎるのだ、能力と精神のその異常のアンバランスな状態が、彼の全力を妨げている。

軍神に傷をつけることすら可能と言わしめた男が、己の心の弱さによって力を封じられているのだ。

この部分が彼にとっては致命的な弱さになる。

「けどどうすりゃいいんだ、俺には何にも残ってないんだぞ」

普段の仮面すら纏わず、ただ途方に暮れる。

あまりにも神童の心が羨ましくて、自分がどれだけ弱いのかを刻み付けられる。抗えるのだろうか、その土壇場、死ぬ間際ですら抗うことが出来るのだろうか。

届かない、空の月を水に飼うように、掴んだと思っても朝になったら消えてしまうようなものだろう。

何一つ届かないのだと理解させられる、したくも無いのにさせられて、結局自分は妹には届かないと言わされる。

どうすればいいのだろう、そんな悩みを時間は解決してくれない。どんな名探偵よりもまじな回答をしてくれるそれは、所詮は後回しの発展系だ、時間の無い奴には何の効果も無い。

追い立てる時間と言う取立ては、侍女という形を持って襲ってくるが、こればかりは勝てもしないので、言われるがままに支払うだけだ。

そうもう誰も彼の悩みなんて無視して動き出す。

疑問も無いただ漠然と、真剣を使った御前試合が始まるのだ。軍神が最強であると言うデモンストレーションの為に呼ばれた、いずれ劣らぬ者達のその全てを競う闘い。

分かっているも軍神と剣を合わせたかった者達、もっと別の目的を持ったものもいるだろう、だがもう始まるの間違いなかった。

ただ一人王の護衛として軍神が控えてはいるが、それだけで分かるだろう、彼女がどこまでも最強であると言うことが、そしてそれに不釣り合いなほどに愛らしい姿は聖女なんて呼ばれ方をしたりするのかもしれない。

それだけ彼女は王に信頼され、同時に最強だと言われているようなものだ。

なによりそんな事をわざと証明する為に、王国の名だたる使い手たちを集めたのだ、それこそ新旧様々だろう、あらゆる世代の最強と呼ばれた者たちを集めて、することは軍神の証明。

彼女であれば誰にも負けないと言う、戦意高揚と、何より他国への牽制だ。

だがそんな思惑は知ったことじゃないのがそこに居るセンセイだったり神童だったりするのだろう。

軍神を殺そうと考えている奴と、それと戦ってみたいと言い切った男、王の長い演説が何を言っているのか、こういう場に出ると考えよりも先に、ぶっ倒れた所為での倦怠感や、そもそも寝てないせいで睡眠不足ということもあり、眠気が今の最大の敵になっていた。

人類最強の敵の一人と激しい戦いを繰り広げるが、中々の劣勢に少しばかり追い詰められてきた。隣に居た一応父親はそんな彼の態度に、このまま剣を抜いて無礼打ちしてやろうかと考える始末だ。

実は鏡面のような二人の邂逅だが、彼は父を視界にすら入っていない。と言うか今は眠気以外は敵がいないので当然だが、万全でも無視されたことは間違いないだろう。

始まるまで、何一つ親子の会話は無い。

それでいいのかと答えられれば、それ以外の選択肢は無いだろう。いつか認めて欲しいと言っていた筈の父親すら彼の視界には無いのだ。彼は憧れと嫉妬以外で人を認めていないのかもしれない。

努力で心が磨耗しきつたのかもしれない、捨て去った何かを今取り戻しつつあるのかもしれない。

だが分かっているのだろうか、悪意を向ける相手を無視する。

それをしたのはただ一人だと言うことを、彼の妹だと言うことを、忘れていないのだろうか、それは自分も同じ穴の貉と言っているだけだと言うことを、嫉妬と言う感情しかないような男は、隣の男の嫉妬に気付かない。

殺してやると願う二人、だがそれは総じてずれていた。

父は息子に、息子は妹に、妹は別に誰にも、誰一人向けるだけ向けて、対象には気付かれても居ない。

さすが家族と言うべきなのだろうか、殺しあうだろう二人、どちらが死んでも気づきもしないことだろう。

相手の嫉妬と無関心に、この家族はきつとどこかで終わっているのかもしれない。あまりにも似通いすぎている。

「各々の技術を見せ付けてくれ、以上である」

そんな王の締め言葉を聴いても、誰もきつと価値を持っていない。

ただ軍神に負けると言われる命令の為にきた者もいるのだ。これは全部が出来レース、そんな事をしなくても誰もがわかっているというのに。

だがそんな出来レースの第一戦は、家族同士の戦いだ。

父と息子、ある意味では父越えの戦いでもある。ルールの説明を観客にしながら、始まりに向かって体を整える二人。

その説明が終わった時始まるのがきつと彼らの殺し合いだ。

その決戦の舞台に晒された二人、どちらも剣も構えずにゆったりと立っている。犬齒としては同じ流派だ当然と言えば当然だろ、どちらもが最強と言える構えのまま、その始まりをゆっくりと待っている。

軍神はその戦いを興味心身に見ていた、兄はどれだけ強くなったかと、何より二人の大切な家族の戦いだ。彼女にとっては楽しみだった、あの弱かった兄の本領が見れると、これでまた昔みたいに仲良くできると。

これで兄が父に勝てばきつとまた仲良くできると、だから二人とも頑張つてと笑っていたように思える。

だが決着はあまりにも容易くついでにしまつ。

しかしその戦いの決着に彼女は兄の生涯を見失ってしまうだろう。たった一瞬の出来事であつたとしても、兄の極めた剣の終着点の一つ。

その証明を妹に見せ付ける事になる王都御前試合第一戦目、その始まりは、高らか宣言されそして、一瞬で終わってしまった。

その血の溢れる音によって。

五章 御前試合開幕（後書き）

だが次の章は少し前から始まる。

そして土日には更新しないけれど、その前日に更新しないと言った覚えは無い。

第六章 ただ再現される月日の形

剣聖と惨敗の戦いが始まる半刻ほど前、今観客達に対して説明や余興などが行われて、周りは程よい熱気に包まれている。

その熱気を受け流すように、ただぶらりとたっているのがセンチイ。

彼の頭の中には一つのことしか頭に無い、自分が弱いというそれだけ、それだけを頭にぐるぐると回し続ける。誰かに相談できれば、もしかすると解決するかもしれない内容だが、それが出来ない男は、ただ自問自答の迷宮に迷い込み逃げ出すことすら出来ないだろう。

それも少しの間であるが、ここは選手の控え室みたいな場所だ。

個室を与えられたりと言うわけではないがそれなりに広く、体を温めるために数人が体を動かしていた。中に派遣を振っているものも居る、自分の身長のはあるだろうかという剣を、片腕で振り回す光景は蹂躪すると言う行為を体現したような姿だ。

あれがかの有名な無双なのだろう、見た目はまだ若いと言うのずいぶんと荒々しい剣を使うと、だがあれでは御前試合には向かないのだろうと同情した。あれは軍隊と戦う為の剣である、ここに居る剣士たちの中でも対集団戦にむきすぎた戦い方に、さすが軍神の当て馬と同情してしまう。

ザインザイツと呼ばれた女騎士、西方の魔人とも呼ばれる王国の理不尽の一人ではあるが、王の命令の為に当て馬になったと言うところだろう。

彼女は忠義の騎士としても有名だ。見栄えが派手な女騎士二人の戦い、観客達も喜んでみることだろう。ましてや殆ど巨塊とも言うべき剣を振り回す存在が敵なのだ、分かりやすさと言う意味では群を抜いている。

だが負けると言われなくても軍神相手では、ここに居る相手すら雑魚と十把一絡げという奴だ。だからこそ己の全霊を出せるようにと体を作っているところなのだろう、自分よりも幼い敵に、自分の限界を見るために。

たぶん後とする相手が彼女の周りには居ないのだろう。今のままでは成長の頭打ちになってしまうと、そこに新鮮な空気を取り入れるつもりなのか、忠誠の騎士と言う割には存外打算的だが、絶対を見ればもう開き直りしかない。

彼の憶測には違いないが、外れではないのだろう。これをいえ無双は凶星をつかれてあわててしまいかもしれない。もしかしたら怒り出すかもしれない。

多分の軍神が強すぎるから勝ていない事を前提に物事を組み立てている。

それこそ自分のような馬鹿でなければ有り得ないと苦笑してみせる。

せめて一太刀なんて思っていればその忠誠後と食い殺されると、あの妹はそれほど理不尽なのだと、自分が知っているありとあらゆる人類の最終形態のような彼女の姿を思い出す。

だが前のように手に極端な震えが出る事がなくなっていた事に彼は驚いていた。いやそれ以上に、妹のことを思い出して笑えるという自分の姿が想像できなかった。

「あれ、え、なんで」

沈黙を保っていた彼の体に灯がともるようだった。

何がおきた変わらぬ自分の手を握ったりは振り回したりして見せる、偽りと思っていたはずのそれは、やはり自分の体で、何が起きたかすら彼にはわからなかっただろう。

胸に沸く憎悪は変わらないのに、殺意なんて抜けきつてもいないのに、恐怖がカランと消え去っていた。

きつと妹がいなかったからと言うのもあるだろうが、それに少しだけ心が軽くなった。

考えても見ればそうだが、自分は戦いたい相手ができただけ。憧れが出来てしまった、それに手を届かせる為に今は必死に成らなくてはならないと、少しだけ開き直ることが出来た。

自分には出来ないことであつたとしても、自分を強いと認めてくれた人達に、頑張りましたとでもいう表現を限りなく尽くそうと。

それだけで心が浮かぶようだった。いまだ抜け出すことの出来ない嫉妬の悪意は、消すことも出来ないまま彼を迷宮にふさぎ続けるが、少しの間だけ、その事実から彼は目をそらそうと決めた。

心が弱い、彼は心が弱い、だから心臓を掴むように心を掴み、頑張れると小さく呟く。

ここじゃ終われないのだと、そして一度過去を反芻した。

終わった日を、反乱を計画したと父に滅ぼされた男爵家、根こそぎ蹂躪されたあの悪夢を、あそこで彼は全部を諦めた。

殺してやると言う言葉だけを杖にして、そうやって生きてきた心の弱い存在は、神童と言う憧れを見つけて崇拜した。

彼みたいになりたいと、そして魔剣の様になりたいと、せめてその人達に誇れるだけの自分でありたいと、それはまるで継る物を求める様なかつての彼だった。それはただ過去に戻っただけ、何一つ変わりはない。

そして妹に嫉妬を、何も変わってはいないただの拗ねた餓鬼だ。

今のままでの強さを騙れるだろう、だがよりどころを無くしてまた怯える日々が始まるだけ。このまま行けばきつと彼には何一つ残

らないだろう、決意一つ果たせず、妹の前で屈服する未来しか残っていない。

「弱いままの心はただ人を求めてさまよっているようだ。」

誰かに認めてもらいたいと、それが自体が悪い事ではないにしても、人殺しが人に認めてもらうなどと言うのは、千は殺してから語ればいい。

虐殺者として認めてもらえるだろう、万を殺せば大虐殺者、十万を越えれば暴君か独裁者か、そんなステップアップしかないと理解しているのだろうか。所詮人殺しはその程度の歩みしか出来はしない。

彼の範疇なんて所詮シリアルキラーがいいところだ。

最もその程度でいいと覚悟はしているのだろう。

だから強くなるかと考えた、この先杖を持たずに妹を殺す為に、きつとそうじゃなければ彼は同じ無様を繰り返してしまう。

目をふさいでも思い出す生涯の無様の限り、最初は妹に負けたところから、同あつても勝てないことを刻まれた時から、努力を繰り返しながら破滅して言った自分。

甲冑を着込んで妹と戦い軽々と惨敗したあの時、そして自分の手から全てが零れ落ちたことを自覚した時、一番新しいものにいたっては刷り込まれた絶望で何一つ体が動かない。

彼は人殺しにすら満足になれないのだ。

「縋ってでも、這いずってでも、それしかないか。それしかないよな」

自分に許された唯一を行使するにはそれしかない、全部自覚していた、自分が彼らに縋っている事も、崇拜している事も、だがそ

れを遣わなくては今の彼は歩くことすらままならなかったのだ。

心が弱いといったが、彼はすでに薄弱といった状態だ。なぜそうなったかなど、いまさらいう必要もないが、彼の始まりは妹で、結局終わりも妹で決着す程度の存在だ。

それだけ存在をすり減らしてまで足掻くのだから、性根の部分は強いのだろう。何しろ負けると分かっつていようと殺すと言いつ張るよくな奴だ。だが柱が太いからこそ余計に磨り減り心はボロボロになっっているのだろう。

何度も立ち上がることは出来るが、そのたびにそよ風でもへし折られる。

考える葦程度にはなっつてほしいものではあるが、そう簡単にそこまで頑張れるほど強くないのもまた彼なのだ。

「神童か、本当に勝ちあがってくれるか。不敗との闘いか、どうなるんだらうか」

しかもだ今から始まる戦いのことよりも先のことばかり、彼がきつと父親を視界に入れるのは、闘いの時だけなのだろう。本来なら復讐をしてもいい立場だし、彼が終わった原因の過半数はこの男にあるというのに、彼はそれすらどうでもいいと思う。

初めて武器を合わせたいと思った男、彼にとっては最強とも思える強さを誇る剣士。彼と戦えるかどうかだけ。

ある意味では彼をここまで破滅させた罰と言えば罰なのだろう。

そののよしあしはこれから繋がると思えば、全ての元凶とも言える男だが、その男が彼と妹の舞台に上がることは無い。

「生まれてきて思うのが妹と男っつて、どこまで性欲枯れてるんだらうか」

性癖だつたらどこまで変態だと軽く自嘲する。こうやって自分を軽んじるぐらいには落ち着いたのだろうが、何もかもがマイナス思考の自分に泣けてくる。

「今から頑張らないといけないから、すこし逃げ道を塞いどこう」

だが軽口がたたけるようになるぐらいには心が回復したのだろう、体に燻る熱をはっと口から吐き出し、誰に言われるでもなくただ武器を振った。

まるで周りに喧嘩でも売るように、しんとなった音は、その使い手の剣が恐るべき鋭さを持っていることをやすやすと証明して見せただろう。

それを見るだけでも腕がどれほどの物か読み切れる者もここには多い。さすがその深遠までは見通すことは出来ないだろうが、それでも片鱗ぐらいは喰らいつくだろう。

「はっははは、これでもう逃げられない、逃げられないぞ、この腐れ弱虫め」

心臓が痛いぐらいに鳴っていた。

こんな挑発まがいの事をやったのは、自分に発破を掛ける為だ。逃げられないぞと、もう縋っても縋らなくても歩き出さなくちゃどうにもならないと、頑張れないなら無理やり頑張ってもらおう。

「もう逃げられない、ここまで調子付いたんだ、逃がさないぞ卑怯者」

自分を奮い立たせるといふよりは、脅迫したのだろう。

ここで動けないようなら何も出来ないぞと、結果が成功したのかどうかは追求はしないが、彼はどうにも笑うしかなかった。

少しばかり強張って、凶相紛いの表情になっているが、それが彼の箔でもつけてくれたのか、周りも同じように笑って見せた、ここにいない妹と父、母以外は、上等だと笑ってくれた。

この時、少しは彼の世界が広がった。

だがこんな挑発紛いの行為をやっていると、いつの間にか控え室が場末の酒場のような空気ではあるが、どうせ真剣を使った殺し合いをやらかすのだ。この程度の空気なければ誰もやってられない。

暗い空気にいるよりは楽しげではあったが、それだけやると彼は武器を振って、軽く剣を体になじませる。努力教の信者の癖に珍しくあまり調整を行わなかったが、それもある意味では挑発だったのだろうか。

ただそういった恐怖を口から吐き出し、自然体になったところに、観客の声が激しく響いた。それが自分の出番だと言うことの証明だろうと、確認すると、ぼんやりと呟く。

「剣聖殺してくるか」

呼吸する様に当たり前に、自然体のまま呟いて、そこにいた全員に驚きを与える。

当たり前だ剣聖とはかつての最強、この国における軍事力の第二位、今なお残る伝説と言ってもいいような男だ。

だが彼は変わらない、軽い調整と当たり前の動作。

殺せないわけが無いと、さも当然のように言い切り、第一試合ですと呼ばれて歩き出した。誰もが瞠目する中、本当に剣聖は殺されるのだろうかと思う。

だがその時ある意味では、人間の範疇における最強が決まってしまうのではないだろうかとも思う。

ただ一人を除いて、そういつてもらわないと困ると、彼もまた控え室だ人知れず挑発紛いの剣を振った。

その時の彼女はすごく機嫌がよかったと言えるだろう。

この後の参上を考えなければの話だが、それこそ本当の意味で嫉妬によって凶相となつてゐる父を見ていないとはいへ、父と兄の闘いが楽しみじゃないわけが無い。

もしこれで兄が勝つような事があればきつと。

「また家族全員が揃うんだもん」

そうそれだけが望みの彼女は笑つてみせた。

相対する二人の剣士、だがその二人には絶望的なさが見て取れた。あの時の兄とは間違いなく違う、多分彼女が見たかった兄。

まるで父親に愛撫されたようにそれだけで彼女の股から蜜が溢れる。あれが兄なんだと、まるで恋に浮かされた乙女のように蕩けた顔で。

「あれ、あれ、あれ」

そんな自分の反応に戸惑う、今までには無い感覚と言つて発情に彼女は驚いていた。

だつておかしいのだ、兄は明らかに今までの形を保っていない。それは開き直つたこともあるだろうが、今だけは前を向くという決意をした所為もあるだろう。

と言つよりもあれだけやつて、怯えるようであればもう妹には二度と手が届かないと確信していた。

そして試合が始まる前、二人は一度だけ視線を合わせた。

もしかするとそこで彼らは初めて父と息子として対面したのかもしれない。彼女はその光景をまるで、何か別のことが起きるような嫌な予感を感じずに入られなかった。

だがとめらる訳が無い、とめられよう筈も無い、今まで人生において全ての事が可能であった彼女だろうが、この二人は止められない。

太陽は輝く、だが全ての闇を照らせるほど万能ではない。ましてや嫉妬などと言う当たり前の感情は、彼女の行動を台無しにしてしまう。

なにより女の彼女が、出すはずだった声を押し留めてしまう。たぶん本能で気付いているのだろう、男二人が自分の為に分争っていると言つ状況を、そしてそれは太陽が翳った瞬間でもあった。

これを見た時、きっと彼は叫び語を得上げるほどに熱狂しただろう。

やはりこの世に完全なものなど無いと、最もだそれが彼女にとってまじな成長であることも理解するべきだ、人は輝かしいものよりも多少でも翳りがあるほうがより人を集めると言うことを。

ある意味では一層完ぺきになったそれに対して彼は何を思うのだろうか。

敵は一層強大になったというべきだ、だが気付かない、いまさら多少成長されたところで絶望的な差は変わりはない。

十の力で挑む男の敵は千を越えるのだ、だからこれは見せしめだと笑う。彼は父親を父と思わない、ただ殺す、これが復讐だと、心の弱い男の嫌がらせだと、自分を追い詰めなければ逃げ出すことしか出来ない男の牙であると。

そして闘いは始まった、軍神という女神の元で、だがあつけない。始まりから終わりまで三十秒、剣聖が武器を振るうべく剣を高く持ち上げた時、その全ては終わった。

「何も言うことはないんだ父上」

「駄作よ」

最後の親子の会話はこの程度の代物で、観客の悲鳴とあらゆる絶望の声が響いたのはそれから数秒後。

ただいんと音が鳴った、ノイズすら混じらぬ純朴な一振り。一体どこから音がしたのかと誰もが首をかしげる。だがその音がこの闘いにおける勝敗を決した代物だと言い張るものであった。

何が怒った変わらぬ剣を持ち上げたままの剣聖だが、思い出したように首に赤い血の線が浮かび首はごとりと地面に転がった。

「え、見えなかった、なにあれ」

軍神の目を持ってしても、彼が剣を振るった軌跡すら見えなかっただろう。早すぎる一撃と言いたいが、軍神の目で見切れぬものなど無い、ただ彼女は首をかしげた、父が死んだ事よりもそうだった事に。

魔法でもない、兄は才能はあつたかもしれないが、その能力を全て剣に転化しているはずだ。なら一体何が起きたと、ただそれは当たり前前のごとくに起きた、一瞬の顛末。

剣聖が死んだ、容易く何も出来ずに、それこそ魔剣を彼が殺したように、首を切り落とされた絶命した。

「もしかして、あれって、冗談みたいな事だと思ってたのに」

だがその技術を数人は見切ってしまう、と言うよりもそれしかない
と確信するしかなかった。

それは遙か剣の御伽噺、剣を突き詰めたものが剣を必要としない
と言つ言葉の遙か先。その中で軍神がポツリと呟いた、御伽噺とし
か思っていないかったその技術。

「軌跡再現」

その男が振るつた過去の斬線を再現する、ただそれだけの技術で
ある。

六章 ただ再現される月日の形（後書き）

うわ、自分で書いておきながらなんだけど反則というか、反則だね。

あとごめんちょっと文字数がいつもより超過したので、日をまたいでしまいました。ちょっと明日が外伝と云うか父親編混ぜるよ。

余りにもこれじゃあ報われない親父の純愛が。

七章 それが家族のあり方なのか

彼女が見たとき夫の首が切り落とされていた。

言葉にすればそんな出来事だ、娘に熱を上げすぎて、剣の腕まで沸いたと思っても下が、魔法ですら出来ない軌跡再現なんていう異常事態を行つたあれが弱いはずも無い。

娘はただ呆然と見るだけだ、あれが父が死んだことよりも兄の業に驚いたあたりすでに、死というものへの決別は出来ているのだから、少しばかりに息子に当てられすぎたのか、意識がこちら側に戻ってきていない。

たしかにあれば御伽噺で聞かされた程度の話し、剣を極めたものが剣も持たずに相手を切り裂いたなんていう、どこにもである御伽噺のはずだった。

魔法使いの彼女がからしてみれば、あれは攻撃召喚及び時間操作の複合魔法と言ったところだろうが、そんなこと出来る魔法使いなんてこの世のどこにもいやしない。

あんなものが人の技であって言い筈がないのに、現実その技が目の前に存在していた。何をどうしたのかすら分からない一方的な斬殺。

剣聖という存在をここまで容易く殺すなど、誰が予想しただろうか。

最後まで娘の事を考えていた男は、何一つ出来ずにただ鬼の様な形相のまま顔を固めて死に絶えていた。

かわいそうな人だと彼女は薄く笑う、息子に殺されたことがじゃ

ない。

そうやって必死に守ろうとした娘は、まるで女の顔で兄を見つめているのだ。

あれはきつと自分と対等になりえるかもしれない者を見つけたことに対する喜び。絶対の存在である彼女の前では王でさえも霞む、なにより彼女はつねに孤独とも言える。

だから肉親を求めて、心許せる何かを無意識に求めていたのだらうと、だがそれは剣聖という男が嫉妬に狂うだけのないようだった。

「私は妻だった筈なのに、娘の方に嫉妬って、そういう意味では私もずいぶんと」

しかし彼女は途中で口を閉ざす。それを言ってしまうば、ちよつと悔しかった。

男連中は若い女がお好みのようだが、そんな少女愛などに拘る位なら、大人の女も味わってみるといいたいが、発酵させる食べ物の殆どが、好き嫌いが極端に分かれると言うことを忘れてはいけない。ついでに言うなら大抵の場合、臭いが天変地異のレベルだ。

そんな長期発酵された元美女は、娘に夫を取られながらも、小野が教示を頑強に保つためにその言葉を使わなかった。

彼女は夫を娘に取られたことをどうでもいいとしか思っておらず、同時の夫が死んだことも、首転がってんなあいつとしか思っていない。彼女の霸王と言う名は、どちらかと言えばこう言ったさばさばとした性格が原因となっている。

だがその彼女にも息子のあれは、以上でしかなかったのだ。はつきり言ってそれ自体は彼女の風の魔法と同格程度だろう。だがあれはどちらかと言えば座標指定の斬撃だ、それがどこか相手にはさっ

ぱりわからない。

ただ変化もなしにいきなりきり飛ばされていると思えばいい、魔法にさえ予兆がある、だがそれさえない。いくつか対処法は浮かぶがそれも完璧ではない、そもそも彼はあのさんげ気を同時にいくつ発生させられる。

あの軌跡の再現とはどこまで行える、過去の事象の再現などというものは、彼女にとっては尋常ならざることではない。娘が生まれいつの間にか視界から消えていた息子だが、久し振りに光の反射を許してみれば異常事態を平然と起こす、ある意味では化け物になっていた。

まして、あの軍神である娘が狂喜するほどの何かがあると考えれば、彼女だって興味が尽きない。

本当につくづく思うことではあるがこいつら本当に親としては再起不能レベルで無能である。少しはあの子も価値があつたのかしらと笑って見せるその態度に、かつての彼なら自殺でもしてくれただろう。

「さすがあの人と私の血と言うべき、性格はともかく優秀な血は持つていったもの、唯一あの人の優れたところだったのかしら」

転がった死体に流し目を送ってみるが反応があるはずも無い。

彼女は問いを返さない死体に酷く落胆したのかため息を吐く。もしかして死んだ振りという可能性も一応は考えたのだろうか、それとも優れた地なのだから少しは動くんじゃないだろうかと思つたのか、どちらにしる血はともかく無能な男とはき捨てる。

あの息子の心の弱さはきつと父親の血を継いだのだと納得してしまふ。

だが彼女が仕掛けた呪いも関係在るのは間違いない。妹の才

能に気付き、それを潰さないようにと、彼女と剣聖でお前は弱いという呪いを刻み付けた。

「まだあの子に会ったら震えて縮こまるのかしら、そうだったら母親らしく抱きしめてあげようか、それとも父親の様に手を出だしてみるのがいいのかしら」

どちらでも面白そうと笑ったのは、自分の事しか考えない、同時に欲望の化身のような女だった。誰も見ていないところだからいいが、ここまで邪悪の似合う魔女もそうはいないだろう。

その表情を見られていたら、息子ならその場で殺し合いでも開始したかもしれないほど、霸王は邪悪であった。

「そういえばあの子の名前は何かしら、適当にえーと夫が、どっちも名前忘れてしまったけれど、必要なかったものね、仕方ないわ、今度あったら聞いておきましょう」

黒のローブの中でぎゅっと手を握り、ファイトだ私と試してみるが、その見た目だけなら娘よりも幼く見える魔女。

十二、三の子供は、深くローブを被り顔すら今は見せない、本来ならば将来に期待といたいあいどけなさの残った造詣は、夫からすれば酷い若作りなのだろうが、この時期が一番美人だったと言い張る彼女は、そんな状態で愛らしく笑いながら悪意を吐いた。

これが霸王と呼ばれる魔女の正体、己の年齢すら操り、すでに三桁を生きた伝説の魔女だ。そんな彼女に倫理観を求めてはいけない、ただ優れた子供を生みたいと剣聖と関係を持ったような女だ。

そして娘との関係ですら、もっと優れた子を生む為に必要な行為とすら思っていた。

「けれどどうせならあの子の種のほうがまだ役に立ちそうなもの」

失敗作と思っていたけれど、存外放り出して逆境に放り込んでみれば存外成長すると笑って言っただけ。

はつきり言えば夫が息子のいた男爵家を没落させた時、いや男爵家を皆殺しにした時、死んだはずの息子は、彼女にとって望ましい方向に成長してくれた。

「あのこの間に子供を、私よりもそっちのほうがいいかも知れない、私やあの人のように雑種よりは純血よね、血を一度純化させてそれから、ああもうなんて楽しい日々なのかしら」

あの子もきつとお兄様との子供を望むに決まっていると、あのとろけた顔から簡単に想像がつく、太陽の光すら飲み込んだ純粹な欲望は、完璧を上回る様に策をくるませる。

何よりあの焦がそう望むのは理解できてしまった。

「本当に流石は我が娘、存分に魔女の血を引いているようで幸い」

もっと優れた血を欲しがるのは、魔女という種族の呪われた性だ。そう考えてみると、最初から彼女の愛しい娘は、兄のそれに気付いていたのかとすら思う。ずっと一緒に暮らしたいと、それは今まで幼い優しさだと彼女は思っていたが、その時嫌でも体が震えた。

だからこそあの夫は娘を盗られまいとあそこまで動いたのかと、彼女はようやく理解した。

「素晴らしい、本当にあの子は素晴らしい、なんて酷い淫売なの、ああもう流石、流石、本当流石は私の娘」

自分の仮面すら剥ぎ取り飛び跳ねるように彼女は喜んだ。

言っている言葉は、殆ど罵倒に近いが彼女なりの褒め言葉だろう。なんて凄まじいほどの売女なのと、だから父に体を開いて兄を産もうとでしていたのかしらなんて笑って言っただけの母親は、ずいぶんと酷い言い様だが、彼女にとっては本当にうれしいことなのだろう。

「ああっそういう意味では本当に私は魔女として、随分と貞淑な女なのかしら。息子の可能性を見切ること出来ないなんて」

抱いてあげればよかったと、この女も笑ってくれた。

こんな母親だとは誰も思いもしないだろう。見た目は子供なのだ、そんな子供から発せられる言葉は、あまりにも酷い言葉ばかり。

死んだ夫の事などきつと彼女の頭にはもう入ってもいない。素晴らしい娘の完成度を喜び、それに続く種が優れていることも理解した。

「ああどうしましょう。式場の準備がいいの、それとも初夜の準備子育て、ああ違うわ、そう、これよこれ、解剖と保存をしないと、ある程度ましな子供を生む為にあの人の種を確保しておかないといけないものね」

そして息子のそれも、ちゃんと生んであげるからと彼女は優しく名前も知らない自分の子供をみる。父親の死体に興味も無いのだろう、彼の勝利宣言を聞くと、観客からの罵倒が響き、それに押し出されるように控え室に戻るセンセイ。

親子そろって熱に浮かされた視線を向けられている事にも気付いていないのだろう。

同時に気付きたくも無いのだろうが、たった一試合で彼を取り巻

く環境は随分と変わってしまった。

結果に呆然とする王や重鎮、そして発情するように覗く霸王と軍神。

死をとじて戦ったものに対する祝福など無い。ただの失望だけが、結局あたりに立ち込める、所詮剣聖も堕ちたものだ、かつての英雄の斜陽は一瞬にして決まり落胆のため息を誰かが吐いた。

それでも最強が、彼らの視線の先には新たな英雄がいる。軍神という絶対的な英雄が、誰よりも愛らしく笑い魅了するその姿に、先ほど英雄を殺した彼が似ているという事実に気付くものは誰がいるのだろうか。

同じ灰色の狼の血を引いたその色に、男と女という骨格の差がそれを隠しているだけなのだろうか、所詮遠目からでは兄妹もよくはわからないものだ。

敗者が無様に転がったままだというのに、次に戦う最強の闘いに、誰もが剣聖のさいごをいつのまにか忘れてた。彼を慕っていた者も多いはずなのに、そんな人物達さえ巻き込んで彼女はここにいる。

淫売と母親に尊敬され、剣聖からは純粹な愛情を、兄からは格別なる殺意を受けて育った絶対は、ただ腕を上げて彼らに手を振る無邪気なその姿にさらに熱狂の渦に包まれる民衆は、今日一番の歓声を上げていた。

「なんと我が娘は淫乱の気もあるのか、なんとも素晴らしい、男も女も構わず、そんな魔女初めて見たわ」

そんな本来なら英雄の凱旋のような時に、あいもしない言葉を彼女は使う。だれかれかまわず魅了する、それは彼女の言うような魔女ではない、だと言うのに、淫乱と褒め称える。

娘は知らずに笑っているが、それでいいと彼女はうなずいた。

聖女であつてもいつかは火炙りにされるのだ。だったら魔女が英雄でも何の問題も無いのだろう。それはそういう性に生まれた者の防衛本能なのかもしれないとその程度にしか、生粋の魔女である彼女は思わない。

だが少しだけ自分と彼女の差に、わだかまりが生まれるが、それはきつと嫉妬の類。しかしそれを上回る愛娘アイシャの成長に感動の方が沸き立つのだ。

今になつて思う死んだ夫に対して、なんて素晴らしい夫だったのだろうと、こんな完全な存在の種を用意してくれてと、まだに改選は始まらないと言うのに、この熱狂にがんばるよーと手を振って見る軍神は、無駄に民衆の感情を沸きたてた。

静かにしてくれと言うつもりで行つた行為は、まるで音の波でも発生させた様に彼女を浚う。壁のように発せられた歓声は、小さな体躯の彼女をあおる様に、目を丸くさせた。

もうとあきれるように呟き、民衆へのパフォーマンスを終わらせると。王の護衛をほかのものに任せ、試合場に飛び降り、大切な父を血まみれになりながら抱きかかえる。

ご苦労様と優しく呟き、転がった首の頬にキスを、どんな姿になつても父親に対する献身を忘れていないのだろう。

もう死んだ男は、それだけで救われるのかもしれない、守ろうと思つて必死になつた形相は少しだけ柔らかくなつたようにさえ思えた。

それに民衆は少しだけ動揺するが、彼女の頬に伝う涙が、父との最後の別れをしたことを教えると、しんと今までの失望すら消し去つて、葬送の空気を漂わせる。

この男は彼女が生まれるより前から国を守り続けてきた男だ。本

来たただの英雄の動作如きで熱狂するべきものではない。

誰かがありがとうと囁く、それがポツリポツリと、周りに伝わり、感謝の雨が降り注いでいた。

剣聖は彼らを守り続けてきた偉大な英雄だ。

ここに現れて死ぬまで、彼は国を守護し続けてきた偉大な男だ。最愛の人に抱きかかえられて、ゆっくりとその人生に幕を下ろす。

拍手が響きその英雄の最後を飾る、娘に溺れた父親では会ったかもしれない、息子を嫉妬のあまりことごとく破滅させた男だったかもしれない。

しかし彼のなした功績は全て賞賛に値し、この拍手を受け取り、最愛の人によって救われてる価値があるものだった。

それがこの世代に残った古豪の英雄の最後であり、敬われるべき男の本来の終わり方であった。

七章 それが家族のあり方なのか（後書き）

お父さんをフォローしたつもりだけど、どうなんだろう。

八章 自分を測る定規

控え室に戻りゆっくりとした息を吐いた。

己の武器すら抜かずに剣聖を切り伏せた惨敗と言う名の剣士、御伽噺の体現者となったそれに対して、奇異の視線が向けられないわけもなく、なんと控え室に微妙な空気が流れていた。

彼らは聞きたかった魔法使いならいざ知れず彼らが剣をつかさどるのなら、どうやってそれを身に着けたのか、彼らは問い正したかっただろう。なにしろそれはある意味では剣を極めた一つの形だったのだ。

だがそんな技術を彼は小手先だと思っている、過去の再現とはつまりは未熟な自分の剣を使うと言う事だ。それでどうにかなるような敵がこれから出てくるわけがない事を理解していた、あれは誰にも見えないところで、不意打ち紛いに使うからこそ価値のある技術であると、彼は思っている。

未熟な自分の剣で勝利を得ることが出来るほど甘いわけが無いと、それは彼の言うとおりだろうが、罅迫り合いからの回避不能のタイミングの斬撃など使い道は様々であっても、その使い方を彼は認めることが出来ない。

彼が殺すべきそれは、その程度の小手先ではどうにもならない理不尽なのだ。

過去の剣が彼の生涯だとしても、その程度でどうにかなるほどの妹は軽くないと、だがそれは彼が自分で手に入れたはずの力だと言うのに興味が一切無い。

雑魚をさらう時には使い勝手のいい技程度の感覚なのだ。

実際にここにいる全ての剣士が一度見たならあれをどうにでも出

来る存在ばかりだ。だから見せた。これより数戦のち彼はあの妹と殺しあうのだ。

だから自分を無理やりにも高める必要があった、小手先ではなく自分を磨く為の時間の質を無理やり伸ばすしかなかった。

「そのために犠牲になって貰ったんだあの人も」

半分は復讐だったが、それぐらいの感情を交えてもいいだろうと思う。あの人がこちらをかまわなければ、間違いなくこんな事にはなっていないのだ。

そう思えば自業自得だと、軽く鼻で笑ってみせる。少しだけ過去の溜飲を下げられた気がするが、根本的にはただ殺すだけの人だった為、どうにも復讐と言う感覚を抱けずにいた。

自分がこうなり果てたのはあの人の所為であったと言うのにと、その事実についた顔をするが、何一つ父親には感情がわかなかった。それにそんな事を気にしても、自分が変わることがない事ぐらい分かっているのだろう。

歓声の奥ではまた妹が人を引き連れる行動でもしているのだろうが、無自覚なくせに随分と先導がうまいと彼は笑っていた。見えもしないと言うのに妹の行動なんて、大体が絵本中に出てくる英雄の行動を予測していれば正解なのだから、本当に何かに作られたような精巧さだ。

選ばれたと言うが、神が思う完璧をつめこんで作った人形のようにさえ彼は感じてしまう。

そんな彼女の有様が、彼にとって不快なもので、彼の暗い劣等感を苛む。あれは生きてはいけけないものだ、拒絶反応を体が起こすように、彼の体は細かく震えていた

それがいまさらの勝利に対する余韻でないことぐらい当人も理解済みだろうが、頑張るといった意地だろう、頬が歪みながらも笑みの形を作り上げようと必死だ。

前進はしているのだろう、卑屈であろうとなんであろうと、神経痛で歪んだような笑みだが、妹を思い出して笑顔を作ろうと考える事が出来る様になっていたのだ。それぐらいには強情が晴れるようになったのだろう。

追い込まれないと行動できない自分がひどく滑稽に見えたのか、笑おうと努力だけはしてみせる。心にあるそれが自分を台無しにしていくのは分かっても、抗ってみようと必死になる。

目に見えて分かる自分の成長に自分はつくづく、誰かにしりをたたかれなければ動けない馬鹿だと納得させられた。

痛感させられる、人は一人じゃ生きていけないのだと、ただ自分を鍛えるように細く鋭くと必死になってきたはずの彼は、思い違いでもしていたんじゃないかと、今までの苦勞を馬鹿にしたくなる。

ただ人がいるから、そしてその人の中に認めて欲しいと思った人が出来た、行く先のない支えてくれる杖を彼は目にして、目の色を変えて努力を始めた。

今まで悪かったわけじゃない、今までがあるからこそ彼は、繋がり人を一倍感じて必死になっている。

希薄だったからこそ薄い糸にさえ過剰に反応してしまう。

その反応こそが彼を変えて動き出させる力となるのだから、元々人に依存傾向の高かった男だ、それが化学変化を起こして成長の材料となっているのだろう。

そもそも妹を殺すと言う絆しか持ち合わせていなかったような存在だ、他の感情を与えるつながりが出来ればもろくとも手を伸ばし、その糸が切れたとしてもあさり続ける。

何かによつて壊れた心は、人の絆によつて少しずつではあるが、その心を取り戻そうとしているのかもしれない。だがそうだとすると彼は、その壊れた心を引きずり出して向かい合うことが必要なだろう。

多分それこそが呪い、妹を殺そうと決意させた、そして妹に狂うほどに怯えた要因はそこにある。

だがそれに向かい合うには彼はまだ弱い。

弱すぎる、彼を尊敬のまなざしで見えるものもいるだろうが、そんな人物達よりも齡の抱かれは、きつと彼はこのまま戦えば、メッキがはがれると確信していた。

「弱いな、本当の俺は弱い」

そう呟いてしまうのも仕方のないことなのだろう。

笑顔を刻んで反抗の態度を見せても、引きつる様な表情には、何より震える体は、彼の心の弱さをいやいや回りに見せ付ける。

人を殺したことがないのかと思うほど、真つ青な顔と笑顔、そして震える体、だがその線は薄く、薬を使っているのではないかと言う疑問のほうに浮かぶだろう。

だとしたら随分きめて掛かったものだ。

しかしそうとしか思えないほど彼は色々と変貌を色濃くしていたのだ。少しばかり周りもそういう関係の心配をしてしまう。

確かに中毒症状のようだが、それでも今の彼は恐怖に抗っているのだ。

「何だあんた薬でもやってんのか、顔真つ青だぞ」

その中の一人が話しかけてきた、神童であるが、今の彼がその程度でどうにかなるほどまともではないことくらい誰でもわかるだろう。

彼の言葉に対して首を横に振る、やってないさそんなものと、震えながらも口に出そうとするが、どうしても声が出ない。

啖呵を切ったときとはまったく違うその弱弱しさに、本当に薬に逃げているように思えてしまう。あれほどの嫌疑を納めた男は薬に逃げるような男であろうかと言う疑問もあるが、そんな彼の状況が許せない女が声を上げる。

「軟弱な、それが剣聖に勝った男の姿か、見苦しいにも程がある」

最後の最強であり普通の王道ラストール、多分この中で最も軍神に近い女だ。

剣聖ですら彼女には負けると断言できる、ただ実直を極めた騎士、八詩篇と呼ばれる魔法剣の中の曇天と荒天の二刀を預かる双房の騎士と呼ばれることもある。

これから後に大魔法使いとの戦いを控えていると言うのに、随分と気が立っていた。多分それは彼があまりにも弱々しく見えたからなのだろう。

仮にもここにいる剣士全てが成し遂げることの出来なかった、軌跡再現と言う奇跡を使いこなす男に彼女は尊敬すら抱いたと言うのに、ふたを開けてみればそれが嘘の様に惨めな姿。

勝者であるはずの男は、ここにいて誰よりも自分が敗者だと言いつ張るように存在していた。

「それが魁たる男児の姿か、誰よりも剣を極めている男の様とは思えん、あれはなにか私たち未熟な剣士に対する侮辱か」

尊敬した男の姿がそれだ、ましてやあの技術を見れば分かる、剣と言う技術においてなら、王国の深遠に立つ傑物だと、そう彼らは見せられていたのだ。

分かるだろうか、誰にも勝てないと思っていた軍神の年齢以外の分野で勝利を収めたようなものなのだ。

そう尊敬した男がこうなったら怒りしか覚えなくても仕方ないと思われるが、それを真正面から表現して見せたのは、彼女ぐらいだっただろう。

闘いには間違いなく不向きな長い髪に、女性としての意地を刻んでいるのか、赤茶けたその髪の色は、荒野の様に枯れた風に靡く様にかさりと舞う。

どこで剣を習ったのか追求したいほど傷の体や顔に、本当に鍛えているのかと追求したくもなるが、逆に傷がないことが彼女の強さの証明なのだろう。

ただ真っ直ぐに相手を見据えるその姿には好感すら抱くが、意志の強すぎる瞳は視線の強さに大抵の人なら目をそらしてしまいたくなるだろう。後ろめたさがなくても、彼女の真っ直ぐすぎる態度は、妹とは違ったベクトルの正しさだ。

「剣聖を倒すほどの使い手なら、前を向いて真っ直ぐに前を見詰めて、慢心なく次の為に磐石に備えるのが常ではないのか、お前のしているのは自分は弱いんです、だからかまってくださいと言っているようにしか私には思えん」

不愉快だったのだ、そこにいる男は自分よりも優れた何かを持っているのに、僕は何も出来ませんと怯える姿が、自分達に挑戦を仕掛けておきながら、終わってみればそれかと思うほど弱い心。

強さと背反するような姿は、彼を一瞬でも尊敬したものには、不愉快にしか感じられないだろう。

「不愉快だ、そして何より惨めじゃないのか、それだけの才覚を持つて何に怯える、何に怯えるのだ」

そんなの決まっていた、彼は怯えていたのではない、抗っていたのだ。

確かに周りには怯えているように見えるだろう、彼らが敵にしない敵を彼は敵とする。その圧倒的な存在は軍神、たった一人だけ神の名を与えられた人類の反則。

弱く見えて当然だ、弱いのは当然だ、自分は軍神より弱いと言う自覚、恐くて仕方がない、全部を台無しにされると分かっている、それをやるのだ。

しかし彼女達とは違う発想が、彼を弱者たらしめている。

神童や彼女のような真つ直ぐとした心が欲しいと、それが出来ない事がわかっているのに太陽に手を伸ばし、月に手を伸ばす、届かないと分かっているの何度でも。

「弱いんだよ、弱いからさ、俺は弱いんだよ」

心が、いこじになつた心が、本音をポツリと漏らす。

あんたらよりも俺は絶対に弱いと、だがそれを彼らは否定したいだろう。どうやればあんなふうに彼らは剣を触れるか問いたかった、御伽噺すら再現する力があるというのに、何が弱いと。

「なにがだ、どこが弱い。貴様は私達よりも上にいるのだぞ」

「どこがだよ、この中で一番無様じゃないか、この中で一番惨めじゃないか、この中で一番汚いじゃないか、なによりこの中で一番弱

いじゃないか」

剣の腕じゃない、そんなのは戦闘だったらどうにでも覆せる。心が、心が、その何度も折れ果てた心が、心だけが、その無様なまでに足掻く心が、壊れすぎて壊れ尽きた心が、その誰よりも弱いのだ。

何をだと誰もが問いたいだろう。

その奇跡を成し遂げた体現者は、自分が誰よりも弱いと言い張る。敵に会うだけで怯える心が、その敵のために動いてしまう心が、泣き出して名に病まない心が、そのうちの闇を誰も知らない。

殺す為に鍛えたそれは、彼の確かな力になっても、支えにはならなかった。

「何を言っている、ふざ、け」

下から見上げるその瞳は、どろどろと腐った泉のようだ。水流すらなくただたまった水が、異臭を上げて悲鳴を上げる。

つねに真つ直ぐと人を見据える彼女は、初めて自分から目をそらしてしまった。だから理解させられる、彼の弱いと言った意味を、嫉妬の混じったその瞳がどれだけ歪な物か。

「ちよつとまで、弱いのはいいが、そもそもお前は誰と比べているんだ」

神童がその目を見ながらも、二人の間に割って入り仲裁しながら自分の疑問を漏らす。

この中の誰よりも弱いと、それ以前から彼は自分が弱いと言い張っていた。だからこそ疑問に思った、誰と自分を比べているんだと。それはきつと神童と呼ばれた彼が、昨夜彼と会ったからだろう、

その時から色々とおかしかったが、自分が弱いと言い張るところだけは変わっていなかった。

「誰って、それはあなた達」

「違うだろう、お前は確かその前からそんな調子だっただろう。昨日あった時だって」

本質はそこだろう、そもそも彼の心なんて誰にも分からない。

しかし誰もが思うのは、誰と比べていると、彼と少しだけ繋がった関係を持った彼だからこそ、いち早くそのことに気付いたのだろう。

いくらなんでもおかしいだろうと、少しは自信を持ってもいい、驕れと言っているわけではないが、それでも誇っていいはずなのだ彼のその成果も実力も。

軌跡再現とはそれぐらいには価値のある証明なのだ

「なによりあんなことが出来るんだぞ、なんでそこまで」

「あんな小手先の技なんて要らない。そんなものに価値なんてない、あの程度で届くはずがないじゃないか」

しかし彼は容易くそれを小手先の技術と言い張る。

流石にこんな事を言い張れば、周りの空気も悪くなるが、彼はそんな当たり前のことを気にしない。

だが対人能力無い彼だ空気が読めない。だから当たり前のよう
言う。

「自分の未熟な過去を使って意味があるとは思わない。あれは不意打ちの為の技術だ」

そう容易く言っただけ。御伽噺に伝えられたそれを彼は、未熟を使って何の意味があるという。

彼らが憧れたその境地を彼は否定する。あんな物はまがい物の暗殺者の技だと。

「あんなものあなた達にも通用しない。なにより」

一度区切った、言っただけのものかとも思ったのだろう。

仮にもあの軍神はこの国における英雄だ、そして目の前にいる彼らの尊敬すべき存在。何より勝利を考えてはいけない反則。下手をすればそのまま襲い掛かられないとも言えないのだ。

だが思案しても欠課は変わらないだろう。

神童も王道も、ある程度察しはついているにしろ、口に出すまで確信がもてない。だからこそここで彼がお茶を濁すと言う選択肢は無い。そういう選択をさせてくれない。

困った顔をして仕方ないと心で呟くと、恥じることは無いと、先ほどまでの薬物中毒のような状態を振り払い。

「軍神には全く届かない無用な技術だ」

彼の比べ続ける肉親の存在を彼らに告げた。

八章 自分を測る定規（後書き）

遅れてごめんね。そろそろ過去の男爵家反乱編が始まるよ。

九章 負け犬と負け犬

それはどう言う事だと、誰かが呟いた。

比べる必要のない最強、理不尽の塊、对国家専用兵器、万人の慈母、様々な賞賛と恐怖を並べ立てられる軍神。

生きながらの神とさえ言っても過言でない相手を、彼は敵として見ていた。

それを当たり前のようにいってしまった彼の言葉は、まるで高度な冗談を吐いている様にすら感じる代物だ。

起こるのは失笑に近い何か、それ以上に何を言ったのか理解するまでの処理のほうに彼らは追われていたのかもしれない。ぽかんと開いた口は、まるで彼をあざ笑うように歪み、一人心の弱い男は視線をそらしていた。

見たくない物を見せられるようだった。彼はこういう目を知っている、理解ができない、それ以上に意味がわからないだろうか。

馬鹿なことを言っていると思われるならいい、それはいわれて仕方のない行為だ。だがそれ以下に見られるのは彼もいやに決まっていた。

理解できないと思われるのがいやなのだ、なんであれと戦う事を考えるのと聞かれるのが一番いやだった。

国を理不尽に蹂躪して打倒しておきながら、その国の人間に支持されるような反則になぜ敵意を抱けるのかと、そもそもなんで彼女を敵と見れるのか、誰もがそう言う目で見てくる。

それがいやなのだ、自分だけがそう思う、誰もが妹の味方をして自分は異常者として見られる。

じりじりと心が焼かれる、それが嫉妬であったのは言うまでも無いが、それが彼の表情を酷く歪にさせていた。何で彼女を敵に出来るの不思議な目で見られる事だけが彼は許せない。

自分だけが異常者だ、まるで世界に一人だけと言われるような虚無感に、心が悲鳴を上げて、その場で喉に刃を突き立てたくなる衝動に駆られながら、嫉妬の感情が彼の命を救う。

不思議な話だろう、ここに居る群を抜いた使い手達の中でも彼女は別格だ、何より一番の異常事態は、それほどの使い手が彼女と戦い勝利を目指していない事実。

ただ一人軍神の刃を届かせると言った男を、彼の憧れた神童すらも視線で言う、どうしてそんな風に思うのと。

世界で一人、もつと言うなら妹は世界中が味方、頭の痛くなる苦痛が、この場で悲鳴を上げさせそうになる。

何一つ無駄だと言われているようだ、沈黙だけが降り積もる中、容易く起こるはずの雪崩も無く、誰もが彼をまるで化け物のように見ていたのだ。言っていることは誰もが理解が出来るが、なぜそうなるかが分からないと言う顔、軍神となった妹はすでに彼らにとつては、戦う相手ですらなくなっているのだ。

ここが、国の最強を決める戦いの場であつたとしても。

「わかっていただけ」

つらいと嘆く、見たくなかつた物だけが見えてしまう。

憧れたものすら軍神には、無意味だと言う事実が刻まれる、ああなりたいたいと思つたはずのそれすら、それは飲み込んで強大になつていた。

何でなんだろうと悩む必要もない、それが妹なのだ、居ても居なくても彼を食いつぶす、史上最強の存在。

そしてまた刻み付けられる。

神童ですらやはり及ばないと言う事が、憧れが台無しにされて怪我された気分、喉の奥から悲鳴がこぼれそうになるのを嫌でも感じていた。

それを押し込めるのは誰も理解してくれないと分かっているからだろう。

軍神とは人を魅了する聖女でもある、何一つ彼がかなうところなんて無い、彼女の汚点の部分が彼といってもいいくらい、完璧な存在。

ここで千の言葉を弄しても届かず、万と言葉をつないで絶望させられるだけ、この世の完全無欠が彼女であると、彼女からこぼれた悪意の結晶は、吐き出したい感情を飲み込みながら、それでも溢れる憎悪に腐臭すら混じった嫉妬の目を下から見上げて彼らを射抜く。

お願いだからそんな事を考えてくれるなど、必死に頭を下げながら彼は願うのだ。

お願いです、そんな事を考えないでくださいと、あれは完璧じゃない、純粹無垢なんてこの世には無いんです、完璧なんて無いのです、お願いだからそう思わないでくださいと。

だが意味は無い、彼女は完璧で、完全で、絶対であるのだ。人という種族に対して完全なまでに優位に立てる反則の結晶は、彼の憧れなど関係なく容赦の無い大波を持って浚って行った。

ああなりたいたと思った、そうならばきっとこんな事を考えずにすむと、無意味だった、何一つ欠片も絶やさず彼の希望を焼き払う。

惨めだった、涙がこぼれ溢れる筈の心が、ぎしりぎしりと軋みを

上げているのが嫌でも分かった。壊れる本当に後もう少し力が入れば彼の心は壊れてしまふ、それを救っているのですら妹である。

ただ妹にささげる唯一の感情が彼を救っている。

ここまで落とされても彼が足掻ける理由はそこだけだった、また奪ったなど、お前はまた俺が大切にしかかったものを奪ったなど、このときばかりは彼女が目の前にいたら叫んでいただろう。

殺してやると、お前だけは絶対に、殺してやると何度でも叫んだらう。

今も変わらず彼の憧れとして存在してしまっている神童は、ようやく彼の言葉を飲み込んで理解しただらう、周りと違い笑顔になった。

感情では否定しただらうが、それでも彼は嬉しかったのだらう。その浚われた心すらも元に戻ってしまうほどには、魔剣を殺した男はさらに上の軍神とすら戦おうとすると考えて、彼は本当に嬉しかったのだらう。

その男は自分ではどうにもならない戦おうとすら考えない相手とすら戦おうとする存在だと思つて。

「そうか、すごいな」

気付かぬ内に彼は言葉にしていた、すごい人だった、自分の無力を認めた上でそう言ったのだ。彼は軍神と戦うなんていえない、はっきり言つてセンセイのいった言葉すら、最小は正気を疑った人間だ。

彼は眼前で一度軍神を見た男だった、戦う前に屈服してしまうと感じたそれに、彼のライバルだった男を殺した存在は、それと戦おうとしていたのだ。

あれと戦おうと考えることに賞賛を感じてしまふ。あの理不尽と戦おうと考えることに、それなのに弱いという男、どこまで自分が弱いと進行する存在は、常に比べるものが強大すぎるのだから。

同情染みた視線を向けるが彼がそれを望む事は無い。

それに神童の言葉を彼は耳にも入れていなかった。絶望が深ければ深いほど彼は孤独にしかねないのだ。

奪われたと絶望したまま彼の耳には届かない、ここで誰が何を言おうとも絶望への伏線だけが練られて行くだけ、本質的に自分が孤独であることを知っているからこそ、理解されるということを経験しないのだ。

今までの人生が彼をそういう人間に変えてしまっている。

そんな事も知らずに、彼は賞賛を感じ次の戦いに負けられないと再度思うのだ。そんな事を理解できるはずもない男は内に燃える感情のおかげで自殺せずにすんでいるだけだった。

「正気が貴様」

そんな彼に追い討ちを掛けようとするのが王道である。

彼女にとって軍神は幼くても憧れの存在だったのだから、完全に異物を見るような目で彼を見ていた。

真つ直ぐ、それだ常に正しいとは限らない証明行為が、彼女の口から吐き出される。

「勝てるわけが無いだろう、あの御方に」

誰もがきつと同じ考えだろう、殺したいと願う彼ですら同じだ。

彼女からしてみればそういう発想すらできない存在、それが軍神

であったのだ。だからこそ当たり前のように、聞きたくもない言葉が耳に入ってくるのだろう。

分かっているのだ、勝てもしないことぐらい、今のままでは自分の刃が届かないことぐらい、全部、全部分かっているのに、お前には無理だと告げてくる言葉は心に突き刺さる。

「これが軍神のお披露目と変わらないのを知らないのか」

あそこまで真っ直ぐな人間ですら変わりはない、平等に軍神は魅了し飲み込んでいく。

恐い、どうやって荒れはあんな風に成れるのか、彼は恐かった、自分もこうなってしまうのではないのかと、恐くて何もいえなくなりそうになる。

大声を張り上げて耳を塞いで、子供の駄々の様暴れなくなる、そんな彼女に負けるよりも恐ろしいことを彼は考えてしまったのだ。

「ここにいる全ての存在が彼女に及ばない事を理解しているというのに」

あの妹に会った時、心が折れたのも全て、そのための前兆じゃないのだろうか、考えれば考えるほど、あの存在の手の中で踊っているだけのようすら感じてしまう。

比べることすら出来ないその反則に、ここにいる人間は勝利の言葉を、なにより挑むということすらも忘れていたのではないだろうか、そう考えるぐらいには軍神の威光は凄まじいものがある。

「極めた程度で彼女にかなうはずが無いだろう、そう言う存在じゃないのだあのお方は」

黙らせよう、これ以上言葉を聴きたくない、彼は心にそれだけ

を考えるようになる。

誰一人王道の言葉を否定するものは居ない、それぐらいに彼女は絶大なのだろうか、それを認められるほど、センチと言う男は聞き分けが良い訳でもない。

何より聞けば聞くほど、いつか自分もあなるんじゃないかと言う恐怖と、本来であれば彼女の様になる筈だった自分の姿のようで、身震いするほど、それがおぞましく見えていた。

口が震える、耳を澄ませばきつと恐怖で歯の根すら合わず、カチカチと負け犬の証明が響いていたかもしれない。

「負け犬は黙っていてくれ」

だが本来負け犬の男は、聞きたくない言葉を塞ぐ為に、喧嘩を売ってしまう。

それが一層、周りの空気を悪くさせるという事ぐらい分かっている、彼は自分が憧れた存在たちから、妹の賞賛なんて聞きたくなかったのだ。

自分だけの特別であって欲しかった、誰だってそうだろう憧れは特別であって欲しい。だがそれが凡人に成り下がる時、失望以外の感情が抱けるだろうか。

そのための言葉ではあったがあまりに辛辣すぎる言葉でもある。彼女が否定した言葉を全て彼は一言で斬って捨てた。空気が悪くなど頃の騒ぎじゃないだろう、ここに居る人間全てを負け犬扱いしたのだ。

それだけならいざ知れず、その事実を否定できないような発言をしてきた王道は、言葉も泣くただ顔を真っ赤にして殺さんばかりに彼を睨んでいた。

神童が一人、目を丸くして驚かせていたが、彼ぐらいたらうそれからすぐに笑えたのは。

否定させないのだ彼は、そのタイミングで言い切った。言葉の全てが負け犬といって過言ではない王道の発言、いやおうなしに自分でそれを認めた顛末。

結局のところ、軍神という膨大な壁を敵として認識していたのは、心が一番弱いくせに抗い続けたセンセイと言う存在だけで、他は戦わずして軍神に負けている者達と言う、あまりにも分かりやすい壁が出来たのだ。

彼らも気付いてなど居なかっただろう。当たり前前に、軍神は強すぎて比べる対象ではなく崇拜の対象だったのだ。

自分よりも幼いそれに彼らはそんな感情しか抱いていなかった。敵にするのすらおこがましいと思っっている者ばかりなのだろう。そういう絶望があったからこそ彼は、全てのことを聴きたくなくて耳を塞いだ。

世界が無音だったら良かったのにとと思うほど、このノイズばかりの世界を拒絶した。

「否定できないなら、最初からこの場所に来なければ良かったんだ」

一触即発という状況に変わりつつある、だが彼らはここで剣を振るうことは出来ないだろう。何しろそれを行えば自分達で認めてしまふことになるのだ。

負け犬であると、彼の言葉の全証明を自分たちでしてしまふ。かといってそれに対する適切な反論が彼らにあるわけでもない。

彼らとしてもセンセイの言葉が聞きたいものではなかっただろう。殺してでも黙らせる必要がある程度には、彼の言葉もまた真理を

突いていたといえるのだ。

「お前に軍神を倒せる力があると言っのか」

苦し紛れの王道の言葉、だがそれは彼にとつても言いたくない部分だ。

この男は嘘が付けない、というよりもうその意味を分かっている。強がりであってもここにはあるといえればよかったのかもしれない、そうすればまだうまく回っていったのかもしれない。

しかし彼はそういう人物だったからこそ、抗うことを止めなかったといえるだろう。

「ない、俺はあんた達より弱いんだ、ここにいる誰より弱い」

どこかと神童は思った、その卑屈な心の癖に、彼ら聞けば気高い宣誓のような言葉。

自分で弱さを認めることの出来る剣士が、居ること自体が奇跡のような話だというのに、それでも強くなるうと抗い続ける精神は何より崇高なものではあるのだ。

「でも、それでも譲れないものもあるんだ」

心の弱さは弱点であっても止まる理由ではないと言い聞かせていた。

何度も心に言い聞かせていた、止まる要因であったとしても、諦める要因じゃないと、この時言葉を後に生き残った者達に深く刻まれることになる言葉だ。

「俺は純粹無垢も完璧も絶対も何一つ認めてなんか居ないんだ」

己弱さを自覚し続けて、逆に弱くなった男の言葉は、なぜか心に深く残るものになってしまっただけだ。

彼のこの言葉に反論が出来たものは居なかった。この後に軍神と戦う無双だけが、その言葉を聞いてどう思ったかは分からないが、一人として彼の言葉に対して、反論できたものはいなかっただけの話。

「俺はあんたも十分強いと思うんだけどな」

神童は呟く、悪かったと席をはずしたセンチに向けて。

彼は弱いなんて思わない、十分に強いじゃないかと、困ったような顔をする。先生の言葉を聞いて思ったのは、勝てる気がしないだった。

「不可能に挑み続けるなんて、弱い奴が出来ることじゃないんだぞ」
そして困ったように出された言葉が、彼に届くのは明日の昼、センチと神童の闘いの中での話しになるのだが、それはまだ遠い事である。

そして少しばかり考え込むようになったほかの参加者達、彼らは心に残り続けるのだらう、先生のいった言葉、軍神を敵として抗うことについて。

ただ不思議なことに、一人を除いて誰もが軍神よりも先に、彼と戦ってみたくなくなったと言うなんとも不思議な結論に落ち着くのだが、それは別に悪意などではなく、その必死な男と剣を交えれば彼が言ったこの場の結論を出せるような気がしたからというだけである。

それと負け犬と自覚させられた仕返しぐらいの考えだが、一人を除いて随分と楽しげな顔であったのは間違いない。

「異端め」

王道 ラストール 彼女をのぞいた誰も、確かにそう思ったのだ。

九章 負け犬と負け犬（後書き）

ようやくまた一人汚れてきましたね。

十章 君臨そして蹂躪

たった一人の軍神は、その寂しさを今になって感じるようになった。

体でさえ感じていた父の温かさじゃない、家族が欠けたという喪失感を感じていたのだ。いくら彼女とて死人を生き返らせるほど人を止めてはいない。

奪う事だけならば人類など超越したものだろが、それは完璧なぞというものは無く、世界の所業だ。

だが死者を生き返らせる等、この世の破滅を意味するだけの代物だ。

しかし数時間前まであった温かさは既に居なく、唇に灯った僅かな感触だけが、父がいた事だけを思い出させる。しかしそんな淡い記憶も、彼女は塗り替えられようとしていた事に無意識ながらに気付いていた。

それぐらいには鮮烈だったのだ、あの軌跡再現と言う御伽噺は。彼女はどうしても剣の求道者の一人である、だからこそ兄のやった事を見てすぐに結論を出したのだ。

あれは見た事があった、彼女と兄の最後の訓練の時、彼女はそこで思っただ。

兄はあの段階ですでに父を越えていたと言う事実を、彼女だって剣聖の実力は十二分に知っている。あの人は剣を振られてからでも十分に感覚で対応できる人間だった。

軌跡再現は所詮だが、自分の剣を再現する技術に過ぎない。極めた人間が使えば想像を絶する話だが、極めても居ない頃の彼の剣で

剣聖が殺せるはずが無かったのだ。

なにより彼女からしてみれば、何が起こったか分からないにしろ、致命傷になるはずの一撃に対して、しかもあれほどの未熟な剣気に晒されて、受けが出来ないと言う事にさえ驚いた。

自分であれば動にでも対処できると言う判断だろう。

そんな事が出来るの僅かな人間だ、だがその僅かな人間だけをこの御前試合は集めているはずなのだ。

それが当然剣聖であつても同じ事はずだ、しかしそれすら出来なかった。反応する事も無い速度で、多々首を切り落とされる。

兄は最低でも十二の時には父を越えていたことになる。

このときに彼女は気付くべきだったのかもしれない。あの時兄が自分を殺そうとしていた事実には、だが彼女は気づきもしない。

うわあと、震えながら声を漏らす。

顔は真っ赤になってひどく嬉しそうなのが印象的だ。しかし周りにはそれが見えなかっただろう、灰色の髪で視界を隠し表情を隠していた。体が震えるのを隠す事も出来ずにいた。

すごいと彼女は声を漏らす、お兄様はやっぱりすごいやと彼女は喜んだ。

「あれで手加減してたなら、お兄様はどこまで上っているの、今の剣の鋭さはきつとあんなものじゃないんだろうし」

そういえばそうだったと思う、夜少しだけ合わせた剣、酷く歪んではいたが、彼女の知る兄の軌跡だった。

だがその軌跡は間違いなく、弱くはあったのだ。しかし彼女が受けた時、間違いなく二の太刀が来ると感じた、それに対して自分が反応できないという確信も。

今までよけられないと思った攻撃など彼女は経験した事すらないのだ。

だから次が見たかった、国ですら彼女を殺せなかった、その事実を拭い去る剣士がどれほどのものか。

その片鱗を見て彼女は変わってしまうのは仕方のない事なのかもしれない。

彼は間違いなく技量において妹を上回っているのだ、何を突き詰めればそうなるか分からないが、それはつまりこの世界において剣において最強という事に他ならない。

最もその程度の事が、軍神に対して意味がある訳が無いのだが、それでも震えた。今彼女の前には自分を超越る存在が居るという事だ。

生まれてから今まで、常に頂点に立っていた少女は、今見上げる立場に変わったのだ。

父の死体を前に表情すら見えずに体が震えているが、周りから見れば悲しみだったのかもしれない、だが間違いなく歓喜であった。

ずっと見上げ続けた男が知らないうちに見上げられた瞬間、だがその時間が短くなるのはいうまでも無い、だが彼は今だけ完璧の一角を崩していた。

国を蹂躪し、最強を貫くそれに気付かぬうちに確かに上回っていたのだ。

「お兄様が剣を見せてくれたんだから、次は私の番。これが私ですって見せないと、なんかおいていかれそうな気がする」

無意識なのだろうが、彼女は彼との距離感に気付いていた。

それがすごく寂しい事にも、彼女に落ち度なんて何一つ無いのだ、ただ妹が兄を慕うだけ、だがそれが一番許されないという事を知ったとき、彼女の表情はどう歪むのだろう。

そしてその顔を見てどれだけの人々が彼を敵とみなすのであろう。

切り離された父を見ながら思うのは、これからの闘いで兄に見せる剣のこと、軍神と呼ばれた彼女が見せるのは、ただの蹂躪だけだというのに、それでも軌跡再現と比べても引けをとる事の無いはずの剣の形。

「ありがとうお父様」

血の香る父の体を一瞥する、その表情は少しだけ髪からかぼんやりと口元だけが見える程度だったが、薄く笑っていたような、もつと違う何かのような、だがもう一度だけ彼女は父の唇に別れを告げる。

口から溢れる生を感じない、その冷たさを感じながらゆっくりと口内を咀嚼する。

血の味などかまった事ではないのだろう、ただ丹念に慰撫するよ
うに、彼女は時間をかけていた。

彼女なりに、愛情を父に持っていたのだろう。

「本当にありがとうお父様、あなたのおかげで私は大切なものが二つも出来ました」

なんてことを少女は言っているのだろう。

ここに誰か一人でも人という物がいたのなら、あまりの事実に実
を疑う事であっただろう。

自分の腹をとて大切そうに彼女は撫でている。

とても大切なのだろう、その腹の中の何かが、彼女と父と親の間の何かが、大切、大切なだろう。

少女はすでに女だというだけだ、比較的珍しい話でもなし。

だがその言葉はもう決別と代わりはなかった。この言葉を生きていた頃に彼が聞いていたらきつと、その場で自分の刃を首に通していた事だろう。

そして今の状態と同じ末路を辿っていた。そしてその未来は確実に迫り着ていたと断言するべきであろう、彼女はどうかあつても彼の軌跡再現という奇跡を持つて、父を捨てるのは間違いなかった。

たとえどれだけ大切な存在が居ても、彼女は彼女であり続けるためにきつと父を捨てた。

「ばいばいお父様、ゆっくり眠ってくださいね」

それで父と娘は完全に断絶した。最後の絆であるはずの彼女腹の大切なものさえきつと彼女は、絆とすら思わないのだろう。

穢れのない純粹無垢な少女、アリスといつてもいいだろうか、彼女はどこまで睦言を父が囁こうと、靡く事は無い。そしてその声は終ぞ響く事は無いのだろう、彼はその言葉すらも娘になめ盗られたように、悲しげに首を床に転がすだけだった。

本来使うはずの無かった御前試合の死体安置所、五人も詰めれば限界という狭い部屋の最後の情事、彼の経歴を考えればそれがどれほど酷い扱いかわかるだろう。しかしそれぐらいには予想していなかった。

自分達で真剣有りといっておきながら、ただ殺しあうという意味を四方の全ての国に攻められている国が理解していなかったのだ。

これは命を削る闘いであるという事実を、これも四方を守る彼らが強すぎた事が原因だ。結果として、中央は彼らがいるからと戦時中でもありながら平和ボケという状態に陥っていた。

つまりはその不始末の結果だ、国はどう言い繕っても滅亡の危機であった。

本来であるなら四方を同時に攻められて、敵を追い払い続けるなどというのは奇跡の所業だ、消耗に消耗を重ねて疲弊し、国力の低下もやむ終えない。

それをとめたのは剣聖、君臨、不敗、死んでしまったが老子といった、四方のいずれ劣らぬ使い手たち。彼らがあまりにも圧倒的過ぎるが為に、国は戦いを忘れてしまった。

そして極め付けが彼女だ、歩く対国家兵器、字面からして反則過ぎるが彼女はそんな理不尽だ。

彼女がいれば大陸統一すら容易い、すでに制圧された北方、多少の反乱分子がいるが、彼女がいればそのカリスマでどうにでもなってしまう。

国力の増大とその背景からの国威の啓発、その全てが軍神という存在の為に帰結してしまっている。

軍神がこの国を駄目にする、あまりに尋常ではない才覚は時として破滅を用意するのだ。完璧など人間がなるべきものではない、人類が群体として存在している以上、その完璧こそが究極的には弱点となる。

それは固体としてしか存在できない。

だがそういった英雄は物語に存在する、物語にしか存在しないというべきだろうか、憧れのまま留めておくことが最良の存在。

だから人は頼ってしまいうだ、全てに負けない理不尽を、軍神であ

る彼女を、気づかぬうちに頼り切って、背中に乗るだけ乗って、気付かぬうちに物代を問題としなくなってしまうたからこそ。

この試合において死者が出てしまった。

剣聖が死んだ事で動揺している王もそうだ、人が死ぬという自体が容易く起きる自称だということを理解しなさ過ぎている。

そうさせたのは剣聖たちだが、王はその同様に必死に軍神でぬぐったのだ。

もう王でさえも彼女から逃れる事は出来ない。彼女の魅力は津波だといったが、それは全てを海に戻すからだ、容赦なく自分という海の元に誰も彼もを引きずり込む。

一度浚われればもがき苦しんだところでどうにもなりはしない。

ただ彼女を飲み干し呪われるだけだ、それは蔓延した国の病気だ、誰一人治ることを望まない軍神病。

完璧が故に感染者を吐き出し続ける、傾国の呪いだ。

そんな病の中心である彼女は腰に下げた剣を一度だけ会場の控え室で抜いた。

王族と近い者たちだけが使用できる専用の個室でだが、無駄に厚遇を受けるが、彼女にはそんな事には興味が無いのだろう。

磨き抜かれた刀身が鏡のように彼女の顔を映す、だがそれは彼女の剣ではなかった。

剣聖が持っていた剣、そもそも彼女はその有り得ない実力の所為か、どれだけ魔力で強化しても武器が一回使えば壊れるという事態に陥る存在だ。

それが故に武器の頓着した事は無い。

だが流石剣聖というべきだろう、彼女が懇親の力を込めて武器を

振るったとしても、罅一つ入らない。

握りの部分を少しだけ弄りながら、自分に相応しい剣に彼女は変えていつているが、その剣はかつての彼女の祖先が使っていた剣だ、銘などは無いが、十数代にわたって戦争に向かいながら刃毀れ一つ無い時点でそれは魔法剣の分類なのだろう。

父が死んでしまった今では、彼女が当主となるしかなくなるが、これで王子との結婚も破談となるしかなかった。北方の英雄の血統はこの国の防衛において欠かす事の出来ない、重要なファクターである。

その家の継承の証としてその剣を抜いて振ってみたが、流石というべきなのだろうしっくり着たようで少しだけ頬を緩ませた、彼女はここで自分の愛剣を手に入れる事になる。

「ん、いいかんじだ、これで私を見せられるかな。見ててねお兄様」
彼女は酷く可憐に笑っていた、それが彼にとっては背筋の凍るような言葉であったとしても、才能じゃないのだ彼女はすでに、一個人が人を超越する。ただ上に立つだけの呪いの完成品、それが彼女としか言いようが無い。

誰にも好かれる、誰にも慕われる、戦うまでも無く分かる断絶、それがアイシャという少女の存在だ。

「お兄様、アイシャを見ていてくださいね」

その少女から吐き出される言葉は、どうにも禍々しく聞こえるのはなぜなのだろうか。

「頑張りますから」

天下無敵の理不尽は、兄に見られる事を望んで笑っていた。可憐なままに、花が咲き続けるように、まるで夢の世界を作り上げるような彼岸の花畑を作るように笑っていた。

それに晒されるのは、西方の魔人ザインザイツ、ただ一人軍神に抗う男に付けられた毒が効果を示すのかはわからない。

ただ彼女とて憧れる、不可能に抗う事に、勝てないと分かっているくせに抗おうという気が出来てしまった。だがそれが彼女の前で発揮されるかは疑問だ、男の毒などさほどの価値もないのだ。

武器を確認した彼女は早々と場内に入る、早く兄に見せたいと心町にしているのだろう。

そんな中だが、兄は今頃彼女と戦うと息巻いて、参加者に喧嘩を売っているところなのだが、そんな事彼女が知る由もない事だ。

ただ場内に入った瞬間、それだけで観客達は熱狂する。激しい声、本来であれば兄のいる場所まで響いていてもおかしくなかったが、それ以上に彼の狂気が濃厚だったのか、そんな声が控え室に届く事は無かった。

観客達は王を上回るその少女に歓声を込める、信頼をいやそれを上回る依存を、彼女を見て安心する為に、その中で彼女は愛剣をなじませる為に感度も武器を振って再調整をしていた。

無双が来るそのときまで、ここまで万全に体を整えなくても勝利など容易いはずなのに、それが少しだけ観客の心に影を落とす。

控え室のいざこざなど知らない彼女は、無双を楽しげに待ちながら、一度だけ全身全霊を込めて武器を振るう。

この剣ならどこまでいけるのだろうと、その限界点を診るためというのもあっただろう。そして兄に見て欲しいという感情も、だがその一刀は誰もが目を剥くだけの話になる。その一振りで嵐が巻き

起こり、観客が居るはずの席の一角に一つの線を作り上げる。

ただの風圧だけでそれだ、何より観客に傷一つ付けられないその精度、観客席の下にも人がいるはずなのにそれさえ見通してのあまりに容易く行われた神技。

恐怖を飲み込むその彼女の魅力があるからこそ、誰一人恐慌に陥らなかっただけ暴挙は、彼女に対する依存を深めるだけの結果になる。だがこればかりはそういう演出として彼女が狙っていた、分かりやすく自分の実力を兄に見て貰うために、人の賞賛を彼女は使っただけだ。

そんな賞賛とともに無双は現れて絶望する。

その愛剣が壊れていないことを確認し、どこかで兄が自分を見にくれる事を望みながら、彼女はそれでも足りない、油断無く相手を見据えていたのだ。

「なによそれ、勝てるわけ無いじゃない」

抗おうと彼女は考えたはずだが、その程度を容赦なく埋め尽くす彼女の存在は、恐怖でしかないのだろう。

なにより敵意に近いそれを、国を埋め尽くす存在から向けられるのだ、それだけで心を折られたとしても何の不思議があるだろうか。その強大な武器さえも震えて地面に落として無双は恐怖する。

呼吸をするたびに体が震える、それこそ始まりの合図も気付かぬほどに。

だがそれでも少しの間、彼女は動かない。相手が隙だらけと分かっているながら、何度もそのタイミングがありながら、力を蓄えるように静かなままだ。

「これじゃ意味無いんだけどなあ」

残念そうに呟く、だが彼女に飲まれればどんな使い手もこうなるのだ。

むしろ抗おうと考えるだけで、十二分に異常事態ともいえる。だがそれでも無双がはむかうのを悠然と待っていた。

しかしそんな事が起こる事はない。それを分っているくせにゆったりとした時間が流れる。

いつになったら本領を発揮してくるのかと、残念そうな顔を見せるが、挑発にすらならない。純然たる實力差が、無双に攻撃を許す事は無い。

「だめだよそれじゃあ、頑張らないと、お兄様は頑張ったよ」

そうポツリと呟くと、彼女の胎からまるで奮い立たせる様に体の中で何かが跳ねた。それが何なのか、それはいいだが、それと同時に彼女は動き、何もしないまま無双は致命傷だけは避けられた一振りによって敗北を完了させる。

結果としてみれば第一試合と同じ随分とあっけない結末というだけ。

しかしだ民衆はそれでよかった、彼女が負けないと、圧倒的な存在であると言う証明だけが欲しかったのだ。依存を深めながら彼女の勝利に浮かれ狂う、聖女、聖女様と、激しく彼女だけを賞賛するが、きつと耳にも入っていないのだろう。

ただゆっくりと鞘に剣をしまい、くるりと一度だけ場内を見回すと、残念そうに彼女は控え室へと戻っていく。

「お兄様しか私と対等じゃないのかなあ」

完璧という孤独を彼女は理解しつつあった。

無双の怪我を癒して、彼女はいつしか自分の孤独を埋めようと躍りになっていくのだ。今までは父が居たから良かった、自分の心に対して必死に盾となった男がいたから。

だがそれはもう居ない、彼女は本当の意味で自分がひとりだと理解するしかない。そしてそこから踏み出す時、軍神はさらに強くなるのだろう。

しかしそれこそが彼女を目指す男の絶望の糧にしなければならないのだろう。

十章 君臨そして蹂躪（後書き）

もうね、なんというかね、あやらまないよ、今回の見所は無双が嚙ませ以下という事だけじゃないかな。

外伝 彼の軌跡

ザクンザクンと首が落ちていました。

あの当時の男爵領から逃げて来た、人々はそういつていました。

血の川が男爵様の屋敷から流れていたと、人がいっぱい死にました、コロンコロンと首を転がして。

誰もがそう言っていました。

あの時、反逆者として晒され、領民ともども相当数の人が殺されたと聞いています。

彼が変わったというのはこの部分であるのは間違いないでしょう。だがあの土地は男爵家が断絶した後、誰も入る事の無いの土地へと変わったと聞きます。立ち入った人たちの話を聞くと、その辺りに白骨が転がっているそうです。

あれから十六年以上がたつというのに、人々はその土地に戻ろうともしません。

ですが私はある理由から踏み込むしかありませんでした。そこで何が起きたのか、どうしても調べる必要があつたのです。

あの日記を偶然手に入れてから、剣神である悲劇の象徴センセイに私は魅入られたのかもしれない。

彼の人生は苛烈でありました、本人はどうにも心の弱い子供のよきな印象が私はぬぐえませんでした、その家庭はまさに烈火と言ふべき物であつたのは間違いありません。

そして誰よりも血だけが流れる人生であつたと、今までの調査で理解してしまいます。報われない物だつたのは間違いのないのです。

私はそんな彼の見せられその軌跡を辿っています。

軍神などの偉大な人物の奇跡を収集するのが私の仕事ですが、その中でも際立った存在は彼だったのは言うまでもありません。

この国があつた頃の人々なら誰もが知る王都御前試合、その結末から起きた惨劇の数々。

その始まりの血と私が感じているのはこの死の土地へと変わってしまつた旧男爵領です。

僅かな可能性でもと求めてここに来たのですが、予想以上というしかありませんでした、いたるところに戦闘の形跡が今も残つて、死体が散乱しているのです。

その中でも特徴的なのは、過半数の死体の首と体が切り離されている事でしよう。誰も課もわから無い白骨ばかりですが、殆どの死体が首と体が切り離されています。

どこか重い空気のこの場所ですが、あまりにも死因が統一されすぎていて、まるで誰か一人によって起こされた悲劇のように感じています。

この悲劇を目の当たりにした筈の人は、揃いも揃つて仕方なかったんだというだけでそれ以上語ってくれる事も無かつたですが、もしかすると私の勘は当たっているのかもしれない。

その死体もこの領地の忠臣である男爵の館に向かうにつれてその量が増していきます。

かつては風光明媚な場所だったのでしよう、死体を見なければ牧歌的ですからある、なんとも落ち着いた場所です。

湖も近くにあり、そこから水鳥の鳴き声が聞こえていましたが、人がいなくなつたせいでしょうか、自然が勝手に発展して鬱そうとはしていませんが、なんとも落ち着いてた場所であつたような気がします。

牧場などの跡地には、いまだに馬達が勝手に住まい、牛達が勝手に交配を重ねて数を増やしていました。人の営みを離れても、彼らは知られずそのまま勝手に生きていたのでしょうか。

白骨がそんな牧歌的な空気に不釣合いな異様さを出していますが、いつしかそれさえも自然は飲み込んで隠してしまうのでしょうか。

かつて剣神が住んだ場所を死体ばかりだと言うのに随分と落ち着いた様子で観光していたように思います。

ですがそれも中心部にたどり着くまでの話です。

そこは悪夢の精製所ともいうべき場所でした、首が転がった白骨が散乱というよりも積み重なっています。

灰色狼の紋章が刻まれた鎧を着た者達、荒鷲の紋章を刻んだ者達、農民子供もいたでしょう、ありとあらゆる存在が首を切り落とされています。

そして頭蓋骨が、丹念に男爵の屋敷の中に並べられ、屋敷に入った瞬間私は身の毛もよだつような恐怖に教われました。

ザクンザクンと首が落ちていましたと聞きましたが、これは一つの意味によって成り立った悪夢である事だけはこの時理解するしかなかったのでしょうか。

何より剣神である彼は、この事態に対して深く関わっているのと言うまでもありません。

したいから何が起きたか推察する事は出来ませんでした、ただ首を切り落とされて屋敷に丁寧に安置されているという事だけでしょう。

それこそここはカタコンベとでも言うべき場所と見るべきなのでしょう。

そして多分ですがここで死んだ男爵や、その妻、などといった人々は、彼らの寝室のやさしく安置されています。そこでこれをやったのが彼だという事だけはわかりました、何が起きたか分らないですが、この白骨の安置を行ったのは間違いなく彼だった。

証拠といわれても困りますが、彼ぐらいしかこんな事をする人がいたとは考えられません。何しろ生き残りは全て男爵領を逃げ出し身分さえ変えていたのです。

ここにいる死体達は、そう言った事すらできずに殺された人々なのでしよう。恐怖を感じたお詫びに少しの花を添えて手を合わせて彼らの冥福を祈りました。

この当時の反逆者討伐で起きた被害を調べていましたが、男爵側は全滅、そして英雄の兵士達にも随分と被害が出ていたようです。

むしろ最初は男爵側のほうが優位に物事を進めていたと聞いています。

もっともここで軍神と剣神の関係がある意味では破滅したのでしよう、軍神の初陣はここなのです。

そして剣神もまた、多分ここが初陣だったのでしよう。

彼女は気付いていないようですが、反逆者を蹂躪したのは、兄の全てをここで奪ったのは彼女なのです。

私は調べるたびに思います、剣神は軍神によって何もかも奪われた人なのだろうと、そして軍神はそれに気付かないのではなく、彼女のやった結果が偶然、奪ったが為に気づく事も出来なかったのです。

過去起きた事を目をつぶりながら想像します、壊れても仕方のないことだと、人が破滅するには十分足りる光景がここでは起きたのでしよう。

首を転がしながら何か起きた、この辺りには時間でも止まったように人の営みがまだ残っています。それはここで生まれた剣神が、きつと何かを起こしたのでしょうか。あの惨劇以上のことがもしかするとここでは起きたのかもしれない。

私には区別が付けられるものではないのが残念です。

そして思うのはここで過去起きた事は間違いなく、凄惨なものであった事と、剣神と誕生に起因しているという事ぐらいでしょうか。目をつぶれが悲鳴が聞こえてきそうな場所です、血の川が流れていたとされた当時、きつと本当に悲劇ばかりが浮かんで消えていたのでしょうか。

人が壊れるには足るだけの要因が、ここには全てそろっていました。

ここには剣神が壊れるだけの要因が全てそろっていました。

多分というより確実に私はもう二度とここに立ち寄る事は無いでしょう。ですがこの光景は忘れられそうにありません。

ここで一度だけ私は一晩を過ごします、その時に彼の日記を見ました、男爵領に居た頃の彼は随分と楽しかったのでしょうか、帰る前に一度日記を見ながら散策しましたが、そこには彼の軌跡が確かにありました。

ここで必死に生きてきた、剣神と呼ばれる前の少年の軌跡が。

十一章 一本足で立つ者

試合があっさりと片付く数分前の話だ。

一人捨て台詞を掃きながら控え室を出たセンセイは、自分のいった言葉に酷く後悔していた。

負け犬という言葉は自分が自分の為だけに捧げるだけの罵声のほずだった。

「何言ってるんだよ俺は」

彼だけのためにある言葉の筈だった。言った後に走る悪寒と震えに、歪に浮かぶ笑っているような引きつった表情、それを隠そうと必死に口元を塞ぎ、自分に対して必死に幕を張って自己弁護を繰り返し始める。

聞きたいはずが無かった、妹の賞賛など誰からも聞きたくなかった。

それが尊敬し始めていた人々ならなおさらだ。塞がなくてはきつと、自分にとってさらに聞きたくない悪夢がつむがれるという確信を持ってしまった。

「でも聞きたくなかったんだよ。あいつの事なんて」

誰もいない通路で一人蹲り壁に背を預けながら泣く様に囁く、嫌われたくは無かった、だが嫌われてでも聞きたくなかった。

それを聞かされれば妹がさらに恐ろしくなる。

彼にとっては妹と言う存在は殺意の象徴であると同時に、恐怖の象徴なのだ。自分の心を侵食し犯しつくす理不尽の極み。

恐ろしくて当然だ、気付かぬうちに他人を心酔させるようなカリスマをもつ存在。まして見るだけでその魅力に勝手に囚われて行くなど、恐怖以外で騙る事が出来るだろうか。

自己の考えじゃない、ただ存在の魅力で食われる。

それに気付いても勝手に行われる、無意識の捕食行為など、考える事すら恐怖に成り代わりかねない。

彼女がそう言うものだと思われた時、それを崇拜するか拒絶するかはその人しだいではあるが、そんな人の心を食い散らかす存在に恐怖を抱くなどというのもまた難しい話ではある。

彼は何度も妹に心を食われてきた、それに救われた理由というのは、単純に劣等感という存在が常に彼を崇拜側へとやる事を許さなかったのだ。一緒に過ごした時間で彼が妹に覚えた感情なんて、覚えたのは挫折と劣等感、そして疎外感に殺意ぐらいだろう。

光の部分すら全く見えない影の極み、対極であるならまだ救われた、だが全てが劣るそのさまでは、ただ光に焼き殺されるだけが顛末になる。

また光が一つ強くなって、また一つ感情の暗がりがあふれ出してくる。

その感情が、心臓から循環するように体中にぐるりと回る。ただ感情の穢れだけが、

どくんどくと脈打ちながら、頭の前から足の先まで、じくじくと痒みを伴いながら侵食し始めていた。

その暗がり割るように囁くのだ、彼女の言うように動けばいいのだと、そうすれば何も考えずに屈服する事が出来る、苦しむ必要は無いと、絶望を自分の頭から囁いてくれる。

「違うよな、それじゃあ何にも変わらない、変えられない」

必死にその事を否定して、重ね続けて、ようやく自分が保てる負け犬は、自己否定と肯定を繰り返し続ける事で、妹と自分という境界線上を歩いているに過ぎないのだろう。

まだ笑ったほうがましだと、必死にぎこちなくだが現状を笑おうと努力する。

「なりたいたんだよ、なるしかないのに」

なりたいたと、こんなに弱いままじゃ何も出来ないから、強くなりたいと呟く。

強気な態度は全て弱さの裏返し、自分を必死に強く見せようとするだけの負け犬の遠吠えと変わらない、今のままでは、そう今のままでは。

あれだけ痛めつけられれば少しは彼も成長するようで、蹲ってうじうじと感情を押し込めていたが、今回ばかりは切り替えようと剣をこの場で振る。もし見られてたら少し騒動になっただろうが、あたりには誰もいない、何よりそうやって弟子彼は心の切り替えが出来ない。

強くなる為にと、剣を振るっている内だけは必死になれる様にと、心の中にスイッチでも用意しているのだろうか、単純に負けるたびに繰り返してきた男の習慣過ぎないが、それでも抗おうという気を与える。

呪いを引き千切るように、精神の呼吸を彼は整え、感覚を四方に手のように伸ばして、そこで悪寒が走った。

戦いの始まる前の事だ、剣を試した軍神の一振りは観客席ごと闘技場を切り裂いている。

そのラインに彼は居たというだけだが、彼と妹はどうにもこうに

も引き合うようだ、後一呼吸もすれば彼を両断するように襲う一太刀に、彼もまた剣を合わせ、睦み合う様に軌跡同士は絡み合う。

「まで、までよ、なんだよそれ」

彼は理解もしていなかっただろう、ただ襲ってきた軌跡を受け止めるという当たり前の動作を行ったに過ぎない。同様はぼんやりと口から出ても仕方が無い事だ。

軍神の全力の一太刀、それを受け止める事が出来たのは偶然だ、しかもただの精神に対する切り替えの為にに行った精神集中が彼を救った。

二つの軌跡は鈍い音を響かせて、じんと痺れる手ごたえが波紋のように手に伝わる。

だがその軌跡は軍神が己の力を引き絞って降りぬいた、試しの一振り。その国すらなぎ払うとされた軍神が振りぬくそれは、その力を全て切断に重ねた力、それを武器も切り落とされる事無く切り裂いた衝撃は、剣を持っていた彼の毛細血管のことごとくを破裂させ、一瞬にして利き腕は真っ青に染まる。

ただ受け止めただけでも軍神の一撃はそうなる、国すらなぎ払う反則の力。それが受け止め、切り払ったところでどうなるものでもない。そこに残った軍神の軌跡は、形を変え力の塊となってあたりに四散する。

それが容易く先生の体を吹き飛ばし、壁に叩き付けようと唸って吹き荒れるが、痛む手を気にすることなく、地面に剣を突き刺し吹き飛ばすすらも彼は拒否して次の手を作り上げる。

だがその次はこない、ただ広げた感覚範囲を結界の様に広げ、次

の備えを完了させるが、それは無くただ彼の感覚を際限なく広げるだけの無駄な物となった。だがその緊張の生で忘れていた痛みがぶり返す頃、ようやく追撃はないものと理解するが、そこで自分の様子を見て、痛みで体中が悲鳴を上げている事を理解した。

ただきり払っただけだというのに、腕は脱臼し、剣を握るだけで激痛が走る。荒くさめたい気が断続的に彼の口からこぼれ、痛みのみあまり手を剣から離したくなるが、握った手が硬直した様に手を離さない。

どちらにしろ追撃がないことを理解した彼は、握ったままの剣を蹴り壁に突き刺すと、強引に肩をはめる、声を出せない痛みを理解しながら、最低限の戦闘行為が可能な状態まで自分を持つてくる。そして響く歓声でようやく理解するのだ、あれは妹のものだと、あの存在が演出目的で振るった一太刀、それが偶然自分に襲いかかっただけ、そのピエロぶりに少しだけ彼は笑いそうになる、いや笑っていた。

「嘘だる俺」

それは呆然もいえる言葉、激痛まみれの頭すらその痛みを消し去るほどの衝撃。

周りを見ればちよっとした惨劇だ、頑強なはずの大理石などで作られた闘技場は、その部分だけ嵐でも起きたように破滅している。

そんな中に立っていた彼は、感情さえ灯さず妹がいるであろう方向を見ていた。

その消えた無色の表情が、喜色によって彩られていく姿は、宵闇に光駆るテールライトの様な儚さがある。だが彼は笑っていた絶望に歪むそれよりも、なお遠いそれを見たからだろうか。

しかしその顔だけは少しだけ違っていた。

「受け止められたのかあいつの一撃を」

笑顔に成りながら驚愕を貼り付けたままの彼の言葉は、自身の成し遂げた事に対する驚きに過ぎなかった。

自分の成し遂げた行為に恐怖ら感じているのだろうか、足が震えて定まらないが、痛みを感じながらもさらに剣を握りこむ、痛みで頭が助けてくれとほざいていると言うのに、わずらわしいと感情を上塗りする。

「一度だって受け止められた事なんてないのに、ようやく、ようやく」

足ぐらいは掴んだのだろうと、彼は涙を流しそうに成っていた。

痛みよりも喜びが先に来る、嬉しくて仕方がない、自分が間違っていたなかった事を教えられた、進んだ道がちゃんと結果を残してくれたのだ。

やっぱりこの道が間違っていなかったと、彼は喜ぶ、この道こそが自分の道で何の間違いもなかったのだと、少しだけ人生に報われた気がした。

このままでは勝てない証明がなされたと言うのに、それでも彼は嬉しかったのだ。

「随分と無様な格好じゃないか息子よ」

その喜びを土足で塗るのは霸王、彼の母親だ。

だが彼は一瞬目の前の存在が誰かわらかなかった。幼生転化の魔法を使った母親を実は見た事がないのだ。

子供を生む際はどうしても大人のほうが都合がいい、何より無用

な痛みを受ける必要もない。本来であればこれが母だというのに、大人の姿しか見た事がなかったのは、それ以降彼の前に母親が現れなかった事の証明だろう。

生まれ故郷では珍しい、真紅の髪が肩ぐらいいまで伸びて、ビスクドールのような無機質な肌はカラス細工のような瞳とともに、生きてるのか一瞬疑問に思ってしまう

どこの生まれか見た目では想像がつかない幼い子供のような母親は、ぼろぼろな自分の姿を見て、楽しげに笑って見せた。

「だが素晴らしい、随分と成長したじゃないか。心のほうは残念な限りだが、素質はやはりあいつと私の息子だ、随分と高かったようだ」

「母様が、捨てた息子に何のようです」

「先程と随分口調が違うね、そうやって壁を作って、なるほどそれで無意識に心を保護してるのか」

私の呪いはいまだ健在のようだと嬉しそうに母は呟いた。

彼女の言った呪いは別に魔法ではない、それが魔女だけが仕える精神の操作、というよりは誘導だろうか、妹の才覚が分ると同時に行われた精神矯正によって、抗う牙を駆られは抜かれたのだ。

「呪い、なんですかそれは、僕はそんな」

楽しげに首を振って見せるのは、彼女が魔女と呼ばれる所以なのか。まるで手品の種明かしをするかのように、先程と同じ彼と表情を作り上げる。

人形と同じ様だと言うのに、流石親子なのだろう、その仕草のどこかに血の繋がりを嫌でも読み取ってしまう。

「覚えてるだろう、あの淫買に負けたときに、ちゃんと言ってあげただろう、もう二度とお前はあいつに勝てないって」

ただそれだけ呪いと言うには稚拙かもしれないが、幼い子供に刻んだその言葉は、彼の心の根底を覆すものだった。

頭痛がまるで警鐘のように鳴り響く、呪いと言ったそれは成長過程におけるトラウマに過ぎない、だがその後も敗北を刻まれ続けた彼にとってそれは、何よりも悲惨な呪いに他ならないのだ。

心を縛るだけで収まらず、体さえも縛り殺す。

「魔女の言葉は、それを少しばかり先導する、時にはいい方向に、時にはお前の様に、心に指向性を刻んで操る、これが魔女の呪いだよ」

それと今更向き合ったところで、刻まれた呪いがどうにか成るといふ物でもない。

心を操るのとそれはなんら代わりがない。吐き気をもよおし、顔色が一瞬で真っ青になる。

「呪いの確認のほかにもちよっとだけお願いがあつてね」

聞きたくない言葉を最初に吐いておきながら随分と性格の悪い物言いだ。

剣聖さえやすやすと倒した存在に対して、この程度のことをしなければ逆に殺されかねないという彼女の判断だが、彼の目を見ても同じことが言えただろうか。

心が弱いのは、その呪いと言う言葉のせいでもあるだろう。だがその程度なら、彼は十年前に超越している。

呪いさえ振りきり妹を殺すべく最上の一振りを作り上げているのだ。

だからこれはもつと後の事なのだ、だが彼女はそれを知らない、彼がこうなってしまうた事の根幹の原因を、知らないからこそ呪いを信じて踏み込めた。

頭に反芻するのは全て過去、しかしそれは彼が殺した首の数に過ぎない。

今の先生と言う男を作り上げた過去はそこなのだ。それを侮辱した魔女に対して彼は、牙の様に成り立つ妹への殺意を母に向けつつあった。

それでも今何も出来ないのは、過去から自分は負け続ける運命をよりにも寄って家族全員から捧げられていたという事実だ。

自分はどこまで妹の供物だったのかという、絶望は彼にしかわかわらないだろう。

だがここで彼は剣を振る事を必死に耐えた、その理由はただ一つだ。この御前試合を台無しにしないため、彼が多分何の障害もなく妹を殺せる機会はここしかない。

未熟であろうとなんであろうと、ここ以外であれば彼女の盾になる者たちが大量に現れる。

彼らのいるところから少し離れた闘技場からは軍神の賛美歌が民衆によって紡がれている。この国における彼女の支持というのは格別どころじゃない、一つの宗教となっている。

たぶん彼女が死ぬといえば笑って死ぬるものたちばかり、そういう状況なのだ。ただ一度の機会、障害もなく彼女を殺せる最初で最後の機会、彼は逃すわけにはいかなかった。

血反吐の出るような感情を必死に絶えながら、聞くに堪えない雑

音に耳を貸すしかない。

「アイシャを抱いてあげて、あの子あなたが大好きなの」

だがそれで止まらなくなる。

何よりも不愉快な言葉を聞かされた、霸王はただ満面の笑みのまま息子の反応を待つ。断ると思っていけないその言葉が、彼にとってはノイズよりも不愉快だった。

顔色がうつせる、感情が消え失せる、枷が消え失せる、何もかもが消え失せて、彼は自分を止める全てを失い、動くしかなかった。

それから半刻、霸王と王道の戦いが始まるうとしていた。民衆達は先程の軍神の戦いに高揚しているようで、熱気は十二分だといつてもいいだろう。

今か今かと、過去の最強たちの戦いを心待ちにしていた。それはきつと楽しい時間だっただろう、だがそれは一つの風によってねじ伏せられる。

ずりずりと王道が霸王を待っている時に音がした。

試合場もつと言うなら公爵夫人である彼女や軍神の為に逃えられた控え室から闘技場に向かうまでの通路から、何かをするような音が響いていた。

嗚咽のような声が響き続ける、その出口からはまるで死霊の悲鳴が響いているようにすら感じる。

流石は二世紀と半を生きる魔女というべきだろうか、観客をただそれだけで黙らせた手腕は流石というべきものだったのだろう。王道はその異様に感服すら感じていた、ただその音が近づいてくられて。

いやに粘着質な音が聞こえてくるのが、分ってくるようになった。

何よりも死霊の声が鮮明になっていくのだ、嫌でも声の意味が分かってしまう。

殺さないで、ごめんなさい、そんな声だ。

もうしないからと、何度も贖罪を請うというより、命を救って貰おうとあざとく生きる無様の極みのような声が、王道にはしっかりと届いていた。

それが幼子の声に聞こえたのは、きっと通路の反響が少しずつ消えて、鮮明になるたびそれはまだ小さな子供の声だということが嫌でも分る。

ではあの霸王は何をやっているのだと、彼女は事実を確認する前から己に与えられた剣に魔力を込めてしまう。

だが想像が現実を凌駕する事など有り得ない。

ゆっくりと通路から現れたのは、彼女が異端と罵った男で、随分と血塗れであったというだけだ。

その光景に場内は声を失った。

血塗れだからじゃない、呻き声が、子供の呻き声が響いていた。

その男の手の先から、情下半身と腕を切り落とされて、そのまま引き摺られながらつれてこられた霸王が居た。

無造作に切り裂かれたのだろう、腸からはまだ消化も仕切っていない排泄物の異臭が立ち込める。

異臭を発するそれは、男の生殖器のようにだらんと萎えたまま地面に摺られている。

それが足といえはそうなるのかもしれないと、あまりの光景にそんな無駄な事を考えて、ただ恐怖を観察した。

人形のような少女は、眼球さえも貫かれて光すら見えていないだろう。鼻にいたっては削ぎ落とされ、真紅の髪は子供の悪戯の様に引き千切られている。自分の見た目にこだわっていた彼女としては

この上ない侮辱ではないだろうか。

腕にいたってはただ擦じ切りましたと、皮膚が腸詰の先の様に捻られ、血がそこからぽつぽつと垂れていた。ただ声からは救いの懇願が、呼吸をかすれさせながら響いている。

だが気にした様子もなく僅かに残った髪を持ち、随分と不細工になった人形の運搬を面倒くさがっているのだろう、あまり見た事のない不機嫌そうな顔をしている。

一体何が起きたのだと叫び声を上げたくなる、何で霸王がこうなっているのだと、幼いその姿に誰もが陰惨な地獄を見て、声を上げる事が出来ない。

「それあなたの対戦相手だから」

無機質に呟くと彼は面倒くさそうに、その達磨を王道の前に投げ捨てる。それで自分の仕事は終わったと、踵を帰して何事もなかったかのように通路の奥に消えていった。

そして彼が消えてからだ、民衆は恐慌を起こす。軍神をねじ伏せるように起きた惨劇に誰もが、正気で入れなかった、ここにいるのが王道ではなく軍神であるならきつとそれは堂にでもなっただろう。

だが彼女は軍神ではない、ただ起きた事態に愕然として、霸王を殺さないようにと新刊を呼び治療をさせる。ここまで殺されていて、死にはしない、だがこれは彼が魔女にかけた呪いだ。

次もこうすると、だから魔女の心は折られるだろう。

そしてセンセイは妹を除く家族を自らの手で殺してしまう。何よりのこんな私闘が起きて、御前試合が続くのだろうか、だが結局はこれは続いてしまうのだ。

これほど見栄えのいい悪が存在するだろうか、軍神に殺されるだけの都合のいい悪が、ただ彼女の供物となる為だけにこんな騒動を起こした男を王は許した。

この決勝の闘いは、センセイという男の処刑であると誰もが信じる。軍神はあれほどの悪魔を殺せると、民衆達は信じてその光景を心待ちにするだけだった。

兄妹の殺し合いを、この国の民衆は期待した、血の繋がった兄妹の殺し合いを彼らは期待して、期待して、期待したのだ。

十一章 一本足で立つ者（後書き）

副題思いつかなかったか適当だね。とは言っても魔女との闘いの部分がないのは、次の話のためだよ。ちゃんと書くから気にしないでください。

ちなみの次は霸王をメインとした描写になると思います。

十二章 繋がりと言葉の絶望

それは落雷と見紛う一振りだった、感情が纏わりついたそれは、ただの一振りでありながら地面を焼いているようにさえ見える。

おぞましい声が聞こえた、聞くに堪えないノイズが響いていた、その全てを一瞬で切り裂いた姿は、かつての子供の姿しか知らない魔女にはどう写っただろうか、あの軍神をしてよけられないと言わしめた、いや受ける事すら難しいと断言された男の一振りが、どれだけ痛烈だった。

軍神と彼は剣においても性格が違いすぎる、軍神は圧倒的な存在とそのまっとうな剣において他者を屈服させるが、彼は純粹に無駄がない、その武器の力を全て斬る事ベクトルで持っていく。

そんな一撃だからこそ、彼女が常に展開している、無意識系六層防御さえも切り裂く程鋭い一線であった。

ただ一瞬で起きたそれは、彼女の右肩口から左の横腹を一条の線が駆け抜けたという事実を、淫靡に切り裂かれた服から覗く、淡くは初雪のような肌に薄く浮かぶ赤い線において証明させる。

致命傷には程遠いが、その一撃で殺されかねないと確信する事の出来る一振り。

体中から彼女は汗を噴出したように、服に汗の染みを刻み、喉の水分さえも汗に盗られた様に声があまく出せなかった。

「なにを……」

「お前は言いやがったんだ」

それだけでぞっとする声だ、誰にも聞かせた事のないような地の

底で鳴動する溶岩のように赤黒く溶けた熱く重い声。霸王はそれだけで声を失った、失敗したと頭に声が反響する。

「俺に何を言いやがったんだよお前は」

完全に理性が飛んでいた、目は血走り獣の様な表情に、牙の変わりの剣はさらに食い付くような剣気を溢れ返させて獣臭の様に酷くそれが立ちこめ、吐き気のするような濃密な空気が流れる。

問題を起こすつもりは、彼には一切なかった、だが流石にあの暴言を耐え切れるほど彼は優しくない。何よりそれだけは、それだけは、いつては成らない言葉である。

普段なら温和極まりない彼だがこのとき、この場所で紡がれたあの言葉を受け止めることなど出来はしない。

誰にだって言っではいけない言葉がある、目の前の彼にとってそれが、今の類の発言だ。

妹の為に動けなどと彼が言われて動くわけがない。そんな事が出るほど、彼は腹芸に富んでいる訳でもない、むしろ不器用すぎるぐらい不器用なのだ。

諦めて逃げればいい物をそれもしない、それどころか抗おうとして見せる、馬鹿ではないかと、最初にそんな言葉が浮かんでしまうぐらいには愚直である。

「何を言っただんだ今、お前」

だから、そういう言葉を紡いではいけないのだ。

彼は人の言葉を真つ直ぐと受け止めてしまう。良い事であれ、悪い事であれ、その顛末がこれだ、剣と言う分野において極みに立ってしまった男、その分野なら軍神すら上回るその男の逆鱗に触れて

しまったのだ。

完璧と言う存在である軍神に背を追わせる男が、その武器を振るうのだ、ただ怒りの銃弾を込めて、なにより今の彼の剣に彼女は對抗できない事を理解させられる。魔法の構成よりも先に、間違いなく剣は襲ってくる、しかも容赦なく意識と意識の断続した間隙中に。

剣聖ですら行っていた事だ、それを上回る彼はさらにその上を行くに決まっている。

清浄の間隙に一撃を刷り込ませるぐらいの事はやってのけるに決まっているのだ。思考を操る魔法使いにおいて、そこまでの領域にたどり着いた剣士は、もはや天敵以外の何者でもない。

どうしても魔法使いは剣士より遅いのだ、そもそも魔法と言うのが学問である以上、闘いの方ではない、彼女のように戦場でも活躍できる魔法使いはそうはいない。殲滅力という点においてなら最強の一角にはなれるかもしれないが、本来はここに出ること事態が場違いと言っても過言ではない。

しかし霸王と呼ばれた彼女だ、剣聖レベルなら対処が可能であった。

だからこそ彼女は最強の一角と数えられたわけだが、今回ばかりはそうは行かない。相手はさらに上だ、さらに恐ろしいほど突き詰めてくるに決まっていた。

対処が出来る範疇じゃない、どう戦略を組み立てても、先の先をとられて斬り飛ばされるのに決まっていた。これは強さと言うよりは相性が悪すぎるのだ、他の剣士であればそれにさえ対処が可能だったのかもしれないが、どこまで行っても学問の徒である魔法に関わるものが、ただ闘争限りを尽くす場所において彼女は場違い極まりなかった。

しかしそれでも二世紀を超え生き抜き続けた魔女がそれをよしと

する筈もない。

彼よりも長く闘争の場に居た女が、その程度の事を覆せないのであれば既に死んでいなくてはおかしい。逆境を覆す、それが英雄が英雄たる資質であるのだから、だから彼女とて奥の手を持つ。

魔女の中でも彼女しか使うことは出来ないだろう振動発動、彼女が感じる振動を構成と捕らえ、発動すると言うだけの技術だ。詠唱と言う存在が本来であれば必要な魔法だからこそ、声と言う振動を使つて構成を編み上げ発動させる。

振動を声と捉えて魔法を使う術ではある、その辺にある振動を声と捉えるのだ、つまり構成さえ省ける彼女なりの無詠唱では及ばない、さらに次の段階の詠唱法。

「お前は俺に何を言ったんだ」

だが、だがそれを使つてもなおその剣士は彼女を上回るのだ。常識外の構成で放たれた魔法は本来なら命を奪うことなんて容易かつただろう。しかしそれより先に、展開された魔法が発射される一瞬でその構成は断ち切られ、霸王の両足は水平に切り落とされた。まるで達磨落としの様に、がくと上半身が地面に落ちようとするとき許さぬと、霸王の腹に剣を突き立て壁に貼り付ける。

「答えるよ」

「っ」

この男は本来であれば、尋常ではないのだ、心が折れていなければこの程度を容易く成し遂げる。

軍神であつてもあの振動詠唱を阻む事は難しい、だがそれを彼は成し遂げるだけの技量がある。

「え」

背筋が震えた、霸王は甘く見すぎていた。呪いなんて物じゃない、息子に在るのは呪いじゃなくて、もっと別の何かだった。

心に刻んだそのようなものに踏み越えていた、ただ別のものに変わってしまった。本来ならば抱いてあげると言えたかもしれない、可愛い息子と今なら言えたかもしれない。

だが無理だ、これは無理だった。

彼には軍神しかないのだ、ある意味依存に近い、軍神だけに恐怖を感じ、殺意を抱き、彼女だけを呪う、そういうものに過ぎない。

彼に繋がっているのは常に死体ばかりだ、自分達がそう仕向けたからこそ彼はこうなってしまったのだ。

そんな軍神の為だけの悪意を練磨してきた存在に、あの言葉は失敗であり、自分のいった言葉のおろかさ、いや自分の呪いに対するの慢心振りに、彼女は後悔するしかなかった。

彼程度の実力では確かに軍神には及ばないだろう。しかし彼女程度を圧倒する実力を彼は備えているだけの事だ。

今まで見下したものにここまで容易く敗北させられた彼女の胸中はどういうものなのだろう。突き刺された貼り付けのそれは、笑っていた、笑うしかなかった。

「素晴らしい、すばらしい、素晴らしい」

気持ち悪く彼女は笑う、ここで自分が殺されるのを厭わぬ様に。

魔女の血が、魔女の血が、その流れる魔女の血統が、感動の笑いをこぼしてしまう。こんな事があるのかと彼女は笑うしかなかった。

「まさか、えへへへ、ここまで自分の目がふし穴だなんて、殺され

ても仕方がないかも知れない」

目を見開き自分を殺すべく荒れ狂った息子を見る。

その言葉を聞いて止まっているのだろう、先ほどまでの悪寒の走るような感情は一切ない。こんな所でお前は何を言うんだという疑問が顔中に張り付いているだけだ。

ある意味闘争において最も彼が欠落していた部分だろう。精神と言う部分は、最も今の状態ではまともな構成も編めない為、緩やかに殺されるしかないのは、霸王も同じではある。

嬉しかった彼女は息子を褒めた、名前も知らない息子を褒めた。

多分だが自分がつけた事も覚えていないだろう息子を、まるでいつくしむ母親のように笑って褒めた。

その所為で彼女は腕を擦じ切られるわけだが、頑張ったとポツリと呟いた母、そのお子時にすることもなく二の腕を掴むと、握力のままにくちゅんと回る。

「っ　あ、ぎょう　　いいい、あ、が」

それだけで腕の皮膚と筋肉が擦じ切れた、さらに腕を握りつぶすように力を込めるとそのまま関節をつなげている靭帯もろとも引き摺りだす。幼子の腕は彼の握力で、骨ごと握りつぶされたままそのあたりに投げ出される。

べちんと少しばかり間抜けな音が廊下に反響していたはずだが、霸王の押し潰した様な悲鳴が上回る、ぱくぱくと金魚のように何度も口を開閉作業の勤しみながら、舌を噛み切ったのか、酷く血が口から溢れている。

「げあ　　けっつ、ああぐ、ぎああ」

そして次の腕が擦じ切られて捨てられた。

地面に転がり、達磨のようになった彼女は、ゆっくりと自分の重みで切られて行く体に恐怖を感じ、喉の生きを飲み込み血の混じったせきをしながら、それでも耐え切れない衝動を嘔吐として吐き出す。

だがむしろここで死ねたほうが彼女にとっては良かったのではないだろうか。

人は痛みでどう在ろうと屈服する、たとえ歓喜に濡れていたとしても、人は痛みに耐えることは出来ない。

無意識に体を癒そうと自動蘇生の魔術が中途半端に彼女を癒そうとするから、その拷問は続く。

聞くだけならそれはきつと、執拗に行われる子供への殺戮だったのだろう。

「あ、つつああ、ぎいう、あは、はっ、は、あん」

だがそれでも嬉しかった女は彼を見るのだ。

魔女とは、人の極点を望む者である。彼女らにとって人の限界はどこにあるのかと言うのが命題と言っても過言じゃない。

ましてその可能性である軍神、そしてもう一つの可能性が目の前にあるのだ、その両方が自分の腹から生まれたのだ。

自分の齢を二百五十を超えた魔女は、ようやく生まれた可能性に狂喜していたのだ。痛みに屈服しながら、その喜びに体を打ち振るわせ、媚薬を嗅がされた少女のように股を濡らす。

この二人の交配の結果が見たかった、だからそれだけが彼女にとって恐怖だったのだろう。

しかしその発言は随分と余裕があるというものだ

「見るなよ、今まで俺を見もしなかったんだから」

ただ熱いものが目の奥に入ってくる、痛みなど感じないただ暑さだけが、そして暗闇が彼女に振り落ちた。そして宵闇だけが彼女の恐怖を増やしてしまう、完成した傑作がもう見れないと言う苦痛が、魔女を発狂させるのだ。

「俺はもうあんたを見てないんだよ」

いやいやと、血の涙を溢れさせながら、正気さえ狂気に変わるような悲鳴を上げる。

彼の言葉は聞こえない、ただ夜の闇だけが魔女の心を苛む、このまま死ぬとしてもその一瞬まで自分の傑作が見たかったと、彼女はそれだけを願って、叶えられる訳もない。

辺りが血に染まり大理石の上を赤い血が川のように溢れだす。地面にしみる事もなかった広がり続けるそれは、人の致死量などつくに上回っているとさえいえるのに、彼はその状態を俯瞰するだけ。そして突き刺していた剣を抜き去ると完全に下半身を切り離す。霸王には何も感じなかっただろう。彼女の自尊心を抉る為のものだったのだろうが所詮怒りに任せた行為だ、本人はその自覚もないだろう。

後は止めだと剣を振り上げるが、そこに来てようやく彼は理性を取り戻した。

「って、殺すと拙いんだった。馬鹿だな、僕って奴は」

そこまでして、冷静になったところで困ると言うものだが、面倒くさそうに彼は髪を掴むと、ぶちぶちと抜けていくのを楽しげに笑い、そのまま歩いていく。

「二度と言わせないぞ、こっちはなあいつを殺す為にここにいるんだよ」

それだけの為の人生なんだよと、吐き捨てるように母親に告げる。その事にびくんと動揺する達磨は、必死に声を上げるが、舌を自分で噛み切っているのだ、まともに喋る事が出来る筈がない。

だから血の混じった生きが悲鳴のように響くだけ、うるさいと思いつつも彼は何もせずにぼんやりと歩くだけ。

「あいつとの間に子供か、冗談じゃない、冗談じゃない、全く戯言でももう少しはかつての息子に言う言葉があったんじゃないのか」

それに関しては誰にも求めないけどと笑う。

もう彼はそこに居る達磨を母とは認めていない、存在を認めていない、断じて認めるはずが無い。

「家族なんて居ないのに、と言うか家族だった人たちって、俺は全員殺してるじゃないか」

彼に繋がっているのは全て死体だけだ。

生きている繋がりには殺す為だけ、彼は殺す事しか出来はしない。

それ以外の機能が存在しない、人としては不完全そのものだ。

「そもそもあの領民だって殺したのは俺だっけ、ラーキスさん達はすごい優しかったんだけどな、メイニアなんて俺をお兄ちゃん行って慕ってくれてたっけ」

そうやって一度振り返った過去、彼が住んでいた男爵家の日々。
だがそれを一笑に伏す、思い出すたびに笑うしかない、自分には
その資格など無いと言う事実を受け入れるしかなかった。

「全員俺が殺したんだけどな」

そうやって大切な物ばかりを殺したのだ、いまさら生んでくれた
母親や、父親に何の罪悪感を感じる必要があるのだろうか。
そして困った様に途方に暮れた様に彼は呟く。

「次は誰を殺すんだろう」

十二章 繋がりと云う言葉の絶望（後書き）

このテーマは一方通行。もう少し描写を細かくしても良かったかも、というか最近キーボードがおかしい、新しいの買っかな。執筆に時間が掛かりすぎる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8515x/>

略 妹様へ

2011年11月28日01時46分発行